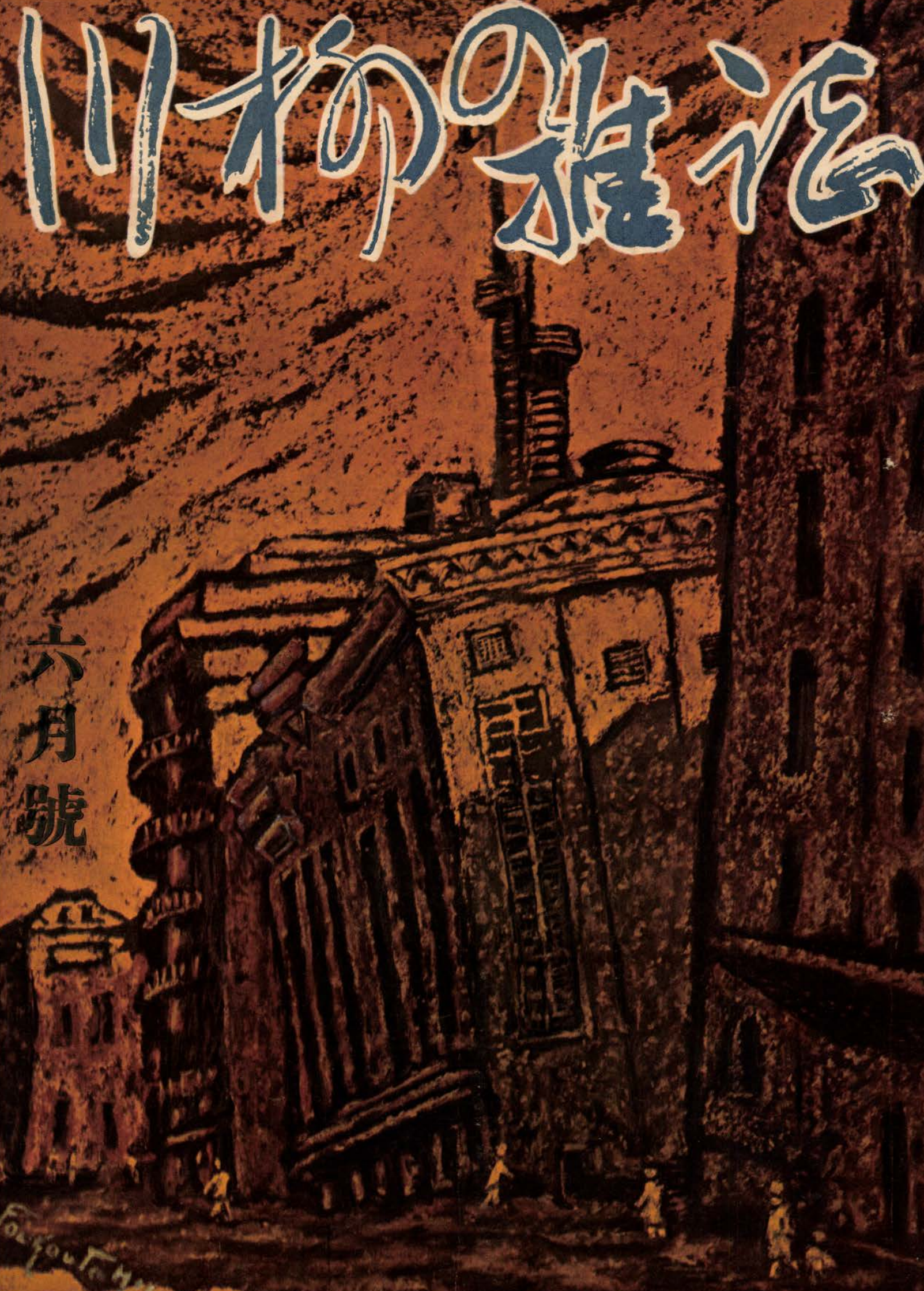
川柳雑誌

六月號



藤村誠一氏著

隨想集

詩人複眼

序　麻生路郎氏
　　百田宗治氏
跋　吉川則比古氏
裝幀　田村孝之介氏

（寫眞は書齋の著者）

「大阪毎日」曰く――

「詩人藤村誠一氏の隨想集、收めるもの『蜻蛉夫婦』以下十八篇、いづれも輕妙な明るい文章の中に人生を語り、機智と諷刺と諧謔ですばらしい料理法をみせてゐる、何よりもまづ樂しく讀める隨想集である」と。

★「詩人複眼」は月刊「川柳雜誌」へ藤村誠一氏が高鷲亜鈍のペンネームで執筆連載の隨想集に「日本詩壇」「日本文藝」「婦女世界」「上方二十世紀」等へ發表の數篇を「詩人胡座」の題下に一括增補した近代人必讀の書である。定價壹圓（送費六錢）―海外送料實費―

麻生路郎著
新川柳評釋
「川雜投句箋」
定價八拾錢　送料六錢
一冊十五錢　送料三錢

發行所　不朽洞
堺市出島町三五一
振替大阪三〇三九二

はに問慰のへ線戰

！を書柳・誌柳

にのたし出とうせでい寒んさ隊兵
りなる來事返とるまこて出が蚊

はのるればころよもてい着つい、てつ逢と
。すで【釋評柳川新】に【誌雜柳川】

Sharp

ラヂオは♪シャープ。受信機

早川金屬工業株式會社

公債・社債・株式・金融

藤本有價證券投資組合斡旋

藤本ビルブローカー證券株式會社

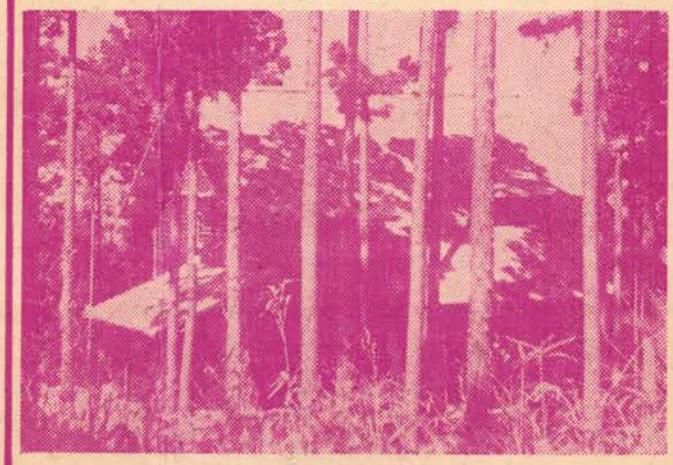
大阪市東區北濱五丁目卅番地

支店　東京・横濱・靜岡・福島・小樽・名古屋・金澤・京都・神戸・岡山・廣島・松山・門司・福岡・臺北・京城・新京・奉天

ハイキング宿泊所

岩湧山の家

高野線三日市町驛下車八粁（岩湧寺境内）



一泊　五十錢　備設　食堂・浴場・賣店

宿泊券豫約發賣所

難波驛南海案内所　（電話・41－48）

南海電車

isoj flugas trans la land-limon

麻生路郎★主宰

川柳雑誌 197

第十七卷 第六號

★内外時事★

★大阪護國神社では五日午前十時から初の例祭が執行され、遺族、來賓ら九千名が社殿大前を埋め盛儀を極めた、

☆安部磯雄氏の新黨「勤勞國民黨」が結成を禁止された。(五月八日)

★英チエンバレン内閣總辭職、チヤーチル海相内閣を組織(十日)

☆一萬圓報告債券を賣出した(十三日)

★ウイルヘルミナ和蘭女皇は英國ロンドンへ蒙塵(同)

☆獨軍、セダン北西方からマジノ線突破(十四日)

★和蘭首都ロツテルダム陷落(同日)

☆ベルギー首都ブラツセル無血陷落(十七日)

★四月十八日中國新政府の南京遷都祝典を壽ぐべくわが帝國が阿部全權大使と數多國民使節を特派したに對し中國新政府は專使陳公博、副使褚民誼兩氏以下二十二名の答禮使節を特派、二十日一行神戸に安着

窓のある風景

(雜感)

矛盾は人生の美しきプリズムだ。私は矛盾を愛し矛盾を憎む。それは憎むが故に愛するとも云へやう。

★

川柳のフラスコには多量の矛盾を抱擁する。その故に私は川柳を極度に愛するのかも知れない。

★

川柳の血液は私の青年時代の血管に奔騰し、三十有七年の長きに渡つて激動してやまない。

★

私は私の舊作

正直がなんのたしにもならず
死に

といふ句をふと思ひうかべた。それと同時にこの句を實踐したやうに死んで行つた武藤山治氏のことをフト思ひうかべた。

武藤氏は實業家としても政治家としても、おそらく氏の右に出る人がゐないほどの正直さをもつて人生を終つた。

その故に私は武藤氏が好きだつた。今世にあらばの感が深い。

★

有恒倶樂部の食堂でクラスメートの雨月氏と夕食を共にした。友は私の生活を案じてか。何か不自由なものはありませんかと聞いて呉れた。私は何もないことを答へた。米は外米を喰べてゐる。誰も彼もが喰べてゐるのだ。私ひとり喰べられない筈がない。内地米を手に入れるための努力は今の私にとつて無駄な努力である。

砂糖がないと炊事をうけもつてゐる娘が報告した。

そうかと私は云つた。そして私は娘に砂糖がなければ無くてもよろしい。人間には糖分が必要である。糖分を含んだ總菜を、醬油が無ければ鹽を、鹽分を必要とすれば目刺のやうな塩物をと云つたまでである。

斯くすることによつて私の日常生活には何等の不安も何等の不自由もない。

幸福は金庫の中になかりけりであるとともに、物資の不足がそれほどに私の生活を脅かしてはゐないことを談した。

そうですか。結構ですなと友は私のためによろこんで呉れた。

★

ある人が私の急激に白化した頭髪を視て、染めたらどうです、染めてあげませうかとまで親切に云つていただいた。有難うございますがと云つた私は其の後も、そのままである。あるがままの生活といふことを考へてゐたからである。

私は絶えず染めねばならぬ時間の不經濟と、染めるがために要する藥品購入の煩瑣を想ひうかべてゐたからである。

しかし、生きるために染めることの必要も、近ごろになつて判るやうな氣もして來た。單にめかすと云ふ意味以外に。

それでもこれが實現は難かしいのではないかと思つてゐる。そうした方面に至つて物ぐさな私だから。

(路郎)

不朽洞句抄

麻生路郎

停年は七曜表に用もなし

柳秀・長崎博士に

的確な打診ナチスもほほえまむ

筑川・布施博士醫學使節として訪獨

往診にしてはナチスの遙なる

洗塵・石崎博士 北市民病院長に榮轉

喜びの電話院長室へ繼ぎ

★最高權威の月刊柳誌
川柳雜誌 六月號目次

表紙…(大阪・中之島風景)…福富雷童
内外時事……(一)
窓にある風景……麻生路郎…(一)
隨筆「提灯」……小山文三…(二)
路郎 葭乃 不朽洞雜談……(六)
田舍に住めば……姫田夕鐘…(八)
人間性の解放(川柳仁義)高鷲亞鈍…(二)
原稿なしの文選工……古川風竹…(二)
武玉川四篇研究(七)……梅本塵山 森東魚…(八) 蛭子省二…(三) 森牛疊…(三)
天鉄羅のこと……
ワカナ一郎とその映畫を語る…諸家…(八)
カルピス(句)……(八)
川柳 二千六百年史(六)……戸田孤篷…(三)
川柳家よ何處へ還るか……蛭子省二…(九)
貝釦……岡田某人…(六)
隱れたる川柳家の話……福田山雨樓…(二)
川柳 解題と例句……路郎編…(一〇)
川柳横町……(一三)
柳壇の頂點に立つ人…高鷲亞鈍…(一〇)
不朽洞會……幹事記…(一六)

★

近作柳檀……麻生路郎選…(一四)
川柳塔……麻生路郎選…(一四)
同舟近詠……諸家…(七)
不朽洞句抄……麻生路郎…(一)
一路國境……高須亞三味選…(一三)
集枕木……岡田某人選
各地柳壇……(二二)
柳界展望……(二〇)
川柳協……(二四)
後記……(二四)
社關係の人々……(二四)

★兵士は戰線に！我等は銃後に！

川柳仁義（IV）

人間性の解放

高鷲亞鈍

A物干へ出て女中さん空をみた　丹路

B果物だ煙草だ女中手をつかへ　靈子

Aの句は昨年十一月號の川柳塔に掲載され、翌月の月評會で路郎師の提出句になつてゐる。Bはこの五月號の近作柳樽に載つた句である。家庭に於ける女中といふ下婢を題材にした句主の、この二樣の觀點に對して一言卑見を述べる。

さてAの句主もBの句主も女中そのものを下婢といつた雇傭者の立場を採つてゐる點には變りはない。ただAの句は女中を裏側から見、Bの句は正面から見てゐる。そして前者は家庭喜劇などでみる三枚目ごころの女中を川柳的に極めて上品に洗練せしめた、あのコメヂキー乃至はユーモアを感じるし、後者は新派悲劇に出てくる家庭の上女中を思はせて、ある憂愁さが漾うてゐる。それ故に、句主の女中觀はAの場合はどちらかと言へば冷膽であり、Bの場合は同情的である。それは換言すれば、Aは女中といふ人間を突放したところに、女中は女中を忘れた人間性に歸つて自由奔放なヒューニンチィを持つことになり、Bは女中といふ人間を取り込むだところに、女中は、やはり女中としての隷屬的、下婢に甘じなければならないある軛に欲つた人間性を汲みとることが出來る。凡そ川柳の素材を――人事句に限つた場合――萬一已より身分卑しき者、或ひは社會的に最下層の者、虐げられし者、不具者、なぞ取上げる場合は寧ろ下手な同情を寄せるよりは冷膽を粧ふ方が、如何にそれらの人々は救はれるか知れない。故にそれらの人

隨筆

提灯

小山文三

「鎗持ちは鎗を使はず、金持ちは金を使はず」との諺は川柳味たつぷりである。

「提灯持ちは先に立ち、用心棒は後につく」の諺も面白い對照である。

○

提灯にも色々あつて、藤莚を敷きつめた廣い座敷の岐阜提灯は涼しそうだが、川裾祭の紅提灯や、天神祭りの迎へ提灯は、あながち涼しさを感じない。

○

弓張り提灯に紋所打つたるは崇高な感があるし、幸四郎演ずる處の、城明渡しの由良之助が其紋所を袂に納めて感慨無量のダンマリの一幕なぞ慥に此提灯にモノを言はせてゐる。

○

小田原提灯は旅の寂寞を思はせて、與市兵衛の旅提灯など一入、山崎街道の淋しさを感ぜしめるものがある。

○

懐提灯は如何にも御隱居樣の芝居見を思はせて一向引立たないが、馬乘り提灯などは鯨の鬚、骨などが附けてあつて莊重であり、尊大ぶつた氣分がする明治維新の志士などが好んで使つたものらしい。

○

火事提灯は勇敢であり、意氣である、明治末期の仕出屋の出前持ちが屋號入りの火事提灯を腰に挿し込んで、自轉車の片手乘りで仕出しを持ち込んで來るなどは威勢のよいものであつた

○

籠燈提灯は鐵の骨と金網で出來てゐて、之れに紙が張つてある、後には漆塗りの釣瓶桶を倒しまにした樣な型のものが出來たが、何れも底が明いてゐて、中の蠟燭が廻轉式に仕組んであるので、提げて歩く時は足許だけしか見へないが、敵に遇つた時は之たを差し向けると相手だけが見へて先方からは手許が見えない仕掛けになつてゐる、これは少し卑怯な感じがするのである。

○

高張提灯は賑かなもので祭禮祝典には無くてはならぬ景物であるが、葬式の白高張に至つては一抹の哀れを覺える、入營、出征などの譽れの家には往々青赤、紫など、ゴテ〳〵した色彩で國旗や軍旗の交叉したのを畫いた高張提灯が吊してあるのを見受けるが、何となく莊重な氣分を欠いてゐるを思ふ。

○

提灯行列は早稲田の學生が明治三十五六年頃其二十年祭とかを記念して宮城二重橋前迄提灯行進をやつたのに始まるとか聞いてゐるが素より考證は確かでない、此頃に紅提灯を使つたかどうかも筆者には判らない。

○

世に「提灯をつける」と言ふ言葉がある、相場界の飛將軍が新東でも買ひ始めると、之れを取卷く無定見の相場師連までが、之れに手を出すなどを言ふのである、恐らくは提灯持ちが主人に隨いて歩く處から出た言葉であろうが深く詮策するにも及ぶまい。

○

三國一の花嫁が通る時、出來るだけ澤山の提灯を點けて、其美貌と其若さを示してやる事も昔には、よい思ひ遣りであつたろう、世の中には主人や、先輩や、親分を彌か上にも持ち上げてやらなければならない場合もあるから、時には所謂「提灯をつけて」やる事も處世上の緊要事かとも思ふ。

○

近來「提灯相場」ナンて言ふ言葉が流行してゐるらしい、一寸聞いただけでは判らないが、つまり闇相場や闇取引が如何にも嫌な氣持がするので之に代ふるに提灯取引と言ふ言葉を以てするらしい、素より「闇夜に提灯」は附き物であるから闇相場と代へても其内容に變りはないのである。

○

由來相場人は兎角頭腦の良いもので、闇だの逆張りだの、手仕舞だのと誠に穿つた新語を造り出すものだが、就中やゝもすれば沈滯せんとする證券界に歐洲戰亂の報を容れて蘇つたのを「神風だ」と言つたり、敍上の「提灯でやる」などは蓋し近來の傑作であろう。昭一五―五―二稿

原稿なしの文撰工

古川風竹

どの國でも、小田舍の週刊新聞は社長兼主筆兼營業部長（中には集金も配達も）と一人三役が通則であるやうだ。ところがハワイには、之に足を掛け圈點を附したやうな存在がある。それを語る前に、ハワイの日本人社會（二世を合せて約十五萬人）

々に對しては餘計な主觀や詮索は避けて、客觀的な態度で作句する事を私は希望したいのである。それは冷酷、無情のやうであつて、決して冷酷、無情ではない。彼らを、吾々と同じ位置に見、同じ立場に置く爲には、掛値のない人間性といふものに限定を與へないことだ。判り易く言へば彼も神の子、彼も同胞、彼も兄弟姉妹だといつた無差別的見解から、彼も人間ぢやないかといつたところの境地にまで這入る事によつて、殊更に、丁稚だから、いや女中だから、いや拾屋だから、いや下駄直し屋だから、書生だからそれから、學校の先生は、頭の惡い學生だから、重役は、內の安サラリーマンだから、銀行員は、內の小使ひだから署長は、ふん一巡査がと、いつた風に見ない事である。つまり人間が人間を裁いちやいかん、いや裁けるものぢやないと、キリストが訓へた通りの態度になつて欲しいと私は言ふのである。そのことが、轟て人間性の解放を約束することになるのである。

もと〳〵川柳の發生は江戸時代に於ける被壓迫階級、即ち當時の町民が權威、權力乃至當時の爲政者に對する反抗ヒガミ、ネタミ、ソネミからくる卑屈な態度を持つて作られたものであつて、昭和の御代の現代にさういつた封建的な觀念でもつて、川柳作句すること、それ自身が既に時代錯誤と言はねばならない、吾々はもつと自由に呼吸できる世界に生きる事だ。幸ひ川柳人である吾々は、その意味に於ける藝術の絕對境地に遊び得る喜びを持ちたいものである。又持ち得る筈のものだと私は考へるのである。

Sata Special Klinik
呼吸器病科
診療 毎年 日前
醫學博士 佐多愛彥 北京
醫學博士 加藤謙一
醫學博士 螺良四郎 長崎 電話151
內科
市電堂島中町停留所北辻西入
佐多醫院
大阪堂島北町 電話八二八四

天麩羅のこと

森牛疊

昨年七月號解題と例句で路郎師の天麩羅の起源が面白く書かれてあつたのを記憶してゐるが最近「長崎と海外文化」といふ大正十五年版の古本を手に入れて讀んだらてんぷらのことが書いてあるので御參考までに紹介する。編者は長崎の文獻研究家古賀十二郎氏である。

『テンプラもその調理の方法が西洋料理法に據つてゐる。そして發音そのものが南蠻の言葉らしく聞ゆる。

岩瀨京山のテンプラ語源の說は面白くない。天明の初年利助と云ふ者が大阪より江戸に下り魚肉のつけあげを賣出した際に山東京傳がこれを天麩羅と命名し「足下は天竺浪人也ぶらりと江戸へ賣來りて創る物故天麩羅也、是に天麩羅と云ふ文字を下したるは麩は小麥にて作る羅はうすものとよむ字也小麥粉のうすものをかけたと云ふこと也」と戲れて說いた。それが天麩羅と云ふ言葉の起源であると云ふのである。

齋藤月岑はこの說を駁して「天麩羅ハ天明中ニ始マリシニアラズ、安永十年正月豐竹東治ノ芝居唄今物語トイヘル上ルリノ內ニ天麩羅ノ事見エタリ」と述べてゐる。

それより遙に前に近松門左衞門はその唐船噺今國姓爺ニテンプラと云ふ言葉を用ひてゐる。テンプラはテンプラリの略稱であると說く者もある。

テンプラは葡萄牙語テンペロTemperoに該當するものと考へたい。果してテンプラリと言ふ言葉が往時行はれたとすれば、それはテンペラドTemperadoの訛りに該當するものと推測したい。テンプラがテンプラリと云ふ言葉より後に行はれたか、其邊のことは判明しない。

テンプラと云ふ言葉はひとり日本ばかりでなく、東印度にても亦行はれてゐる。また支那にても行はれた。』

とある。豐竹東治の淨る利は見つからないが近松の「唐船噺」には上之卷の大鼎引上げの唐の木遺唄の終りに「ひよこりやんるこばいたやさるぜいひいんてんぷら〳〵、はゝはんにやてちやるまひつはらやゝけゝらほに〳〵〳〵ほうとちとわけ分らぬ言葉で唄はれて居る。本作は享保七年正月竹本座上演（作者七十歳）だから今から二二一九年前で利助の元明初年からは約六十年も間がある。近松は今の天麩羅を意識してのてんぷらを用ゐたか如何かの疑問もあるかも知れないが昔の東國歌に、うらが齋坊にや豆腐こんにやく禁物だといふを假名を上下へ置替へて「らうがときろくほにやふたうにやくこんもつきんと」と食物を並べてあるから矢張り今の天麩羅を指したものと思はれる。

言海を見ると「語ノ姿ト調理ノ趣トヲ考フルニ洋語ナラムト思ハル、斯斑牙語Templo（寺）ノ料理ノ意ナラムフイトイフハ率强カ、或云支那ニテ現ニ轉不稜トイフ、是ナリト、或云油ヲ天麩羅ト記セルナリト、其他山東京博ノ天竺浪人云々ノ說ナド何レモイカガ」云々とある。

中耳炎に
多くの中耳炎は、その初期に於てすら適切な治療藥を缺き、慢性にありては殆と手術的解決を用ふるのが常である。然るに近時ズルフオンアミド劑、特に二個のズルフオンアミド基を有するアルバジルが耳科的方面に廣用諸國の擴大されるに及んで、中耳炎の療法は劃期的な進歩を見るに至つた即ち、膿症にありても其の內服により膿汁の停止、解熱、疼痛の緩解等治癒經過の短縮に成功せしめ、中耳炎に確信ある療法を樹立するに至つた。
包裝
錠劑（〇・五）二〇錠・百錠
粉末・十瓦有
アルバジル錠
社會式株
大阪 山之內藥品商會 東京
ALB 40

川柳塔

＝路郎選＝

兵庫縣川西町　戸倉普天

髪結ひに紋付で來る芦屋村
重役の婚禮社では汁粉が出
故郷のある事が嬉しい米不足
看版と茶種大阪驛近し
停年に近く課長の居眠れる

臨知山　小畑自由朗

氏神も掘り倒す氣か試掘權
峠だけあるく約束木炭車
生きとりますと芋虫のびて見せ
オトドシもたしか此の妓は二十一
強ひて云へばみんな氣ありと腦病院
今時の妓はと老妓は隅で彈き
古里は大阪そして路次の奥

大阪　橋本綠雨

外交員四五人よつて世を呪ひ
吹殼を拾ひ人間働ず
噴水の前で辨當開くとし
地下足袋で働く女も連れて行く

大阪　高橋かほる

御返盃洗ひ髪から櫛が落ち
猥談も云ひ主催者を微笑ませ
昆布卷き屋通行止へ口を出し
寢過してほこり叩きが顔へ落ち

張家口　岩崎柳路

このわたで二本位はいけるロ
それ程の嫉妬心とは知らなんだ
春や春額のニキビ見つけられ
妹の戀人を見た春の宵
ほごの良いおあそびですとをだてられ
いゝ仲居からかつてるへお手が鳴り

兵庫縣　寺井鋭々

ほめるにもほめやうがない電髪ぢや
洋裝の露はな腕が觸れるバス
胃病の原因外米だけでなけれども
インフレの部門に居らず靴は減り
四等があればとおもふ汽車に立ち

布哇　高澤一浪

もう笑ひますと北支の父に書く
針の山敵も味方も目白押し
特權と言はぬ許のせびりやう
たまたまに錢あり街を大手ふる
情婦曰くそれ見ろ金がつきたろが
白粉の匂まんざらにもあらず
兩風に笑つた儘の地藏さん
安酒は承知ですんだ瞳に酌がせ
名に生きる癖がたゝつて落ぶれる
通る妓の後姿に遠慮せず
履歴書の代り女給の目鼻だち
内の娘も二八隣の娘も二八
運轉手お二人さんに敵意あり
石の門聞けば曾ての女らし

大阪　戸田孤蓬

盛り場の醫者は明るい灯をともし
ガスビルの花嫁野次つてもみたし
塒には本讀む場所も作つき
借金をしてるとは見えぬ花の村

ホノルル　古川風竹

日本語も止せといふのか米化論

布哇で日本語ニュース放送禁止

鎔鑛爐俺は地金のままでゐる
三角の戀のもつれは神代から
散華して布哇の伯父へ光るなり
日曜を無言で家に居るもよし
美人畫のあとに寂しい壁の色

ハワイは人種の鎔鑛爐

ホノルル　前山北海

氣の弱い癖に女の情知り
儲けたらおごる約束そのまんま
古バンの安さ喜ぶ子澤山
意識したサーヴィスでは駄目ですよ
黑枠に一言居士が納まつた
事勿れ主義にと變る處世術
斷つた寫眞をそつと出して見る

大阪　麻生葭乃

初蚊帳の中はシャツ着たキリギリス
乞食でも先祖は倉もありつらむ
流浪して故郷を知らぬ事に馴れ
十三荷里で死ぬとは知るまいが
月見草一番星が出はじめた

★

大阪　北川春巣

背中から木刀買はす男の子

結婚（二句）

今日からの挨拶私達と云ふ
赤い物がうちにも干せる嫁が來る

新婚旅行（二句）

新婚旅行乘せてる銅鑼の響きやう
國寶の前で女房の顔を撮り

大阪　田中風葉

橋下の生活に政治論もあり
廣告をはさんだまゝの勝手口
人生の裏を歩いた手を見つめ
繪葉書へ新妻として名を竝べ
雨だ雨だ義理のお供が延びとなり

生活の斷片といふ靴磨き
端然と代用食の椅子へ掛け
吹ひ差しに未練が出來て來る落目
やりくりのこつ新婚をうなづかせ

廣島 濱田久米雄

役人のあたま商賣人の智慧
あゝ戰時若葉の京を素通りに
春がすみ女にねだるものが增え
新世帶先づ外米の飯が出來
美しく生きる姿を金魚見せ

大阪 菊澤小松園

この國の捉悲しき政治犯
家主との紛議は春に持越され
この上の慾は寢棺でやかれたし
いろは丈讀める女のふしあわせ
ネエサンのおつとめおぼろげながら知り
遊覽バス娘を賣つた金で乘り

大阪 魚住滿潮

待つほどににんげんとして現れぬ
重役にさん付けされた晝さがり
子の椅子に座りなほして子を正し
唐辛子しんぼしなはれ他人のこと
唐辛子春の夕べの母の唇
きんぎよ酒貴公もいける宵であり

大阪 清水史路

町內會甘えてゐるはお婆さん
陽さん〳〵こゝに病後の土いぢり
歸還兵ふと台所したくなり
神さまは外米可なりとおつしやつた
ふとこころ手ごうやら闇が太かいらし
ほろ着もの送れば米の荷が屆き
小休止腹の立つよな余裕見せ

大阪 清水白柳子

身賣した豚トラックへぶち込まれ
褌を引出すやうに錢を出し
芋の葉の露はダイヤに似てころび
肥擔桶紙治に似たる頬かむり
お寺かと思ふ田舍の醫者で待ち
雜魚釣にお手々繫いで子と出かけ

德島縣穴吹町 姫田夕鐘

銃後でも第一線の勇士なる
木炭車或はのたりのたり行き
ハイキング十錢がとこバスに乘り
拾ひ屋が來て春眠を起したり

名古屋 吉田水車

九官さんの言ふことにアーノネー
ルンペンの箱にも鍵がかかつとる
地藏尊犬殺されるのを見ておわし
石切さんジステンバーもたのまれる

大阪 須崎豆秋

弟の靴を揃へてやる出征
論功行賞發表
正七位呼鳴勳五等功五級
飛行機を見上げる時の一休み
同感は只目で物を云ふばかり
兩隣入學出來てABC

大阪 後藤青兒

決死隊ニコット笑ふひまがあり
水だけを呑んで初日の下を征く
夜襲命令俺は飯たく用があり

大阪府柏原町 宮岡白峯

素人が要りますカフエー喫茶店
榮の花と櫻と春の川とあり
さけ肴犬がねてゐる春の店
久振り女の方は少し肥え
別れゆく同志小鳥はかごで鳴き
手にあまる荷物で老婆乘つてくる
女ひとり青森行の切符買ふ
嫁ぐ氣になつて妹と仲がよし
ひけそつてくればよかつたことになり
動かない・エスカレーターは淋しいね
親分は親分らしい下駄を穿き
夕立がきそう牡丹の色が濃し
銃後も春巡査に叱られてゐる人出

大阪 正本・水客

一家みな坊主枕をはづして寢
旅客機がゆつくり過ぎる春の雲
身輕さは鞄一つの轉任さ
柳の芽思案の鼻の前でゆれ
塀裏を女中と女中愚痴つて來
女難とはみくじ嬉しいことを云ふ
未拂のまゝの保險も掛けて征き
ぬぎすてゝいつそ目に立つ女下駄
銀婚式に招かれて
內祝ひ椿をつたふ雨が銀
醉うてゐる足は廊下の雨へ立ち
口實の法事と出合ふ喫茶店

豊中 黑川紫香

逆境の夢うつくしい男也
バット品切れ春雷の街をゆく
盲人のほゝに勝氣をフト感じ
酒のんでうれしや野心まだ捨てず
にやけたる男競馬の運に乘り
神戸にて
五月雨るゝ背山がうれしビルの窓

尼崎 酒井斗風

釦貝

★

岡田某人

女權なんかと。甘えるではない。自分で自分の責任を持てる女がゐるか。ゐたらお目にかりゝたいものだ。但し責任を持つといふことが、自殺や別離や辭職だといふのなら又何をかいはんやだ。犬の方が、自分の失策や不埒をよく識つてゐる。

※

女。すぐ財布をのぞき込む。

※

見識か金か。前者をとる。見識では喰へないかも知れないが金では安心は得られない。喰ふだけなら、むしろ人間辭職だ。

※

豆をいるやうな音がしたのでそおつと覗いてみたら豆をいつてゐた。

※

不埒を働いた犬のやうに……

※

押へるために息をつめたら、炭酸のやうなものがシュンと鼻の裏をつき上つて來る。いけない、と口を大きく開いて、走つて來た犬のやうにハアハアと荒々しい息をしてゐると、やつとかなしみがうすれて來はじめた

※

幽靈をつかまへてあるんです青ばんだ柔い風の流れてゐる淺春の朝早く、散歩に出たのですが、ある邸の黒塀、土から一間あまり石垣がつんであつて、その上に黒塀が立つてゐる、あれですが、邸の裏側、つまり北側の方にあたるので、その石垣にはところどころ苔がくつついてゐて、それから知られるやうにこの邸は相當年數を經たものらしく、そう云へばその邊の空氣までがひやりと少し濕つてゐたやうでもありましたが、まだらなかさぶたをつけた石垣のわれ目あたりをうろうろしてゐるのを捕へて來たのです。掌のなかでも、家へ持つてかへる間ぢうもぞもぞしてゐましたが、とうとう小筥の中へ入つてしまひました。その小筥といふのは、それぞれの稜つが約一インチ位の正方形で、しかもどこを引くり返してみても黒と白との縞が入つてゐる、おまけに腕時計の寵頭位の眞鍮色の錠前までついてゐる奴なんです。そうです、この話をするには、どういふ徑路でもつてこの小筥が私の手許へ入つて來たかといふことを一通り話しておく必要があらうといふものです。——（縞の小筥）

※

古い言葉。それは丁度使ひ古された黄楊の櫛のやうなものだ今なほ使はれてゐるのには、押へると油がにじみ出るやうなるほひと含みがあるし、現在つかはれないそれは乾き切つたうそ寒さと、少々の龜裂と、それから、油の上にかむつた埃がついてゐる。

新造語——これは又、セルロイド製だらう。

※

何百年も成長しつゞけ、まだ生きてゐる大木。

これは善だ。

※

十びき位はゐるだらう。何を喰はせるかといふんですか。あ

路郎 葭乃 不朽洞雑談

★低氣壓襲來——雨

葭乃＝今日は、みんなの急所を衝くことにしまへうか。

路郎＝それもエ、なア。

葭乃＝鋭々さんの句でんがナ。この人の生活苦を出した川柳は、何んや上ッ面な觀方のやうな氣がしまんが……。

路郎＝例へば？

葭乃＝前號に出てる。

夜櫻も知らずミシンの出來上り

と云うやうな句が鋭々さんに時々ありますが、あの程度では、駈け出しの人の句ですナ

路郎＝なか〳〵酷評をやるネ。

葭乃＝鋭々さんには巧い句が澤山あるんだから、それ位なことを云うてもよろしいわ。詰まり御本人は非常に珍らしいやうに思つてられるだらうけれど、そう云ふ經驗を持つてる人や、そうした悲慘な話をザラに開ひてる人たちから見ると、句として深酷味が足らん。要するに鋭々さんは下情に通じさせられん譯ですな妾がそんなことを云うたらお手許拜見と云ふ人があるかも知らんけど。

路郎＝まるでお殿樣扱ひだネ。下情に通じる通じんと云ふのも程度問題だが、「夜櫻」の句はたしかに、新派悲劇式に拵えた句の匂ひがするし、生活苦と云つたところで生溫るく上すべりがしてゐるといふ非難を甘受しなければなるまい。大體、鋭々君のやうな社會的に餘裕のある生活をしてゐる人たちに深酷な生活苦表現の句を求めたところで多くは失敗に近いものとなる。矢張り、餘裕（物質的にも時間的にも）のある人は餘裕のある句、朗らな句、感覺的な句を目指して進むのがホントではないかと思ふ。自分では可成り深酷なところを詠んだ積りでも、人生に對する眞に苦い經驗を嘗めて來た人から見れば、それほどでもないと云ふ事になるからな。ホントに金の苦勞をした事のない鋭々君では「金策へ靴を磨かぬ日がつゞくや」「床の軸はめて借金たのむ也」の程度しか云へないのだから、この方面の句はアッサリあきらめて、同じ生活を詠むなら鋭々君らしい

鳩時計兒が留守中も鳴つて居り

や

白靴を踏まれた日腐る事多く

虫が鳴きそろ語りに來られ度そろ

の句境へ行くべきだネ。もう一度繰り返へして云へば同じく夕刊を取材とした句でも

土砂降りの中に夕刊賣れ殘り

でなく

紅茶は空ら夕刊も見たがまだ待たせ

で行くのが、鋭々君の境地だね。この方面ならなんでもない事を詠んでゐるやうで、時間的餘裕を見せた、のんびりさが出てゐて、うれしい句だと思ふ。

葭乃＝斗風さんに

豆炭を夫に買はす公休日

と云うのが、おまんなア。何處でもイザとなつたら男が出陣せねばならんのですナ。女ッてあかんもんだすナ。青柳有美やつたか、誰れやつたか忘れたけど、女を批評してる記事で「女と云うものは、自分の貴任である子どもさへも一人でよう扱はずに、かなはんやうになると、すぐに、お父さんッと云うて、夫を煩はす」と書いてありましたが。

路郎＝もたれかかり戰術と云うのだらうネ、つまり女はズルインだネ。

葭乃＝あまり亭主關白をきめこむと、そんな目に會うのですわ。

路郎＝これでは關白でなくて、下男だネ。男はオダテられると直ぐ動く癖があるからな。しかし句としては、どう思ふ？

葭乃＝まあ、前に云うたような場合を摑んだ句であるが、叙法の上から見ると、席上吟でザラにある句ですな。同じく主人公を詠んだ句でも

陶枕酒もお強き五十すぎ

の方が妾は好きです。何んでッしやろ？

路郎＝低徊趣味の瀬石黨だからさ。「豆炭」の句より「陶枕」の句の方が叙法の點から云うても秀れてゐるし、句の味から云うても格段の相違があると思ふ。「豆炭」の句に味がないのは名詞止めできめつけてあるからだ。

葭乃＝梅田支部の人たちは、親分が鮎美さんだけに、鮎美さん張りの句が時々、誰の句にもありますな

路郎＝それは仕方がないなア。

葭乃＝斗風さんの

彌陀如來僕と子供の手が溫し

などは、その一例です。由布さんにも

しあはせを感じましろな障子みる

があります。

路郎＝この句に、假名の多いの

のピロードの苔を一つ一つ小さく離してそれを入れてやるんです。電氣の下でみると、じつとしてゐて、實にあはれなんです。——（綿の小筥）

※

何も考へなかつた一日。それは動物的に爽快である。

※

何かのためになること、そんなことは御免だ。惡事ならちよくちよくやつてもいゝ。

※

芽。これはいゝ。忍耐の歪みもなければ努力の皺もない。あるのは自然だけだ。甘えてゐるやうな生毛、ぼかんとしてゐるその色合。背中から陽をうけて見てゐると、ほつと胸の中に灯がつくやうな氣になるではないか。

※

人類今日の進歩はかゝつて文字の發明に原因してゐる。

※

藝術家みたいな風丰。こいつは多分に不幸だといふ氣分を含んでゐる。

蔑乃＝句が先輩に似ると云ふのは仕方がないのか知れませんけど、個性を失つては駄目でせう。

路郎＝それは、それに違ひないが、時々、似た句ぶりがあるからと云つてすつかり個性を失つてしまふものでもないよ。

蔑乃＝櫻川不水さんの句に

役人にややらぬと親爺五十過ぎ

と云ふ句がありますが、さつきの斗風さんの

陶枕酒もお強い五十すぎ

も、鮎美張りだな。

路郎＝席上での相撲吟だつたら「役人にや」の方が勝つネ。

蔑乃＝姿も、そうおもひます。不水さんの句は、そも〳〵川柳の作りはじめの時から、他人の句を模倣せずに、大膽に自分勝手に云ひたいやうに云うてはるところがあるので、好きだけど、この句の場合は甲乙はなくても、陶枕の方が落ちつきがあつて好きです。「役人にや」の句は親爺さんの句と、どつちも同じ五十過ぎを詠んでますが、これが若し相撲吟やつたら、どつちが勝ちまツしやろ。

路郎＝句の價値の比較は實際、むづかしいネ。これを觀賞する人の、環境、性格、その他によつて一概には云へないからネ。

☆後晴れ

路郎＝閨秀作家では——貴志子さんかな。

蔑乃＝線が太くて、センチな句は全然無いのネ。まあ、あるとすれば、

磯馴松霧のヴエールを被て靜か

ぐらゐなものでせう。あとは大概社會觀察の句が多いやうでんな。

路郎＝そや〳〵。

うぢ虫が仲間を蹴つてせり上り

でも、

追はれてる椅子の溫みが棄てられず

にしても、鋭どいネ。胸にピストルを突きつけた形だ。

あの鼻が廢娼論をとなへさせ

は皮肉だぜ。

蔑乃＝男の人が詠みそうな句だんな。

路郎＝閨秀作家には男性的な傾向を帶びた作家が多いやうだネ。

蔑乃＝幽香里さんも、そうだんなア。此の間伯峯さんから聞くまでは男の方やとばかり思つてました。廣島支部のあの人の句を見て御覽。

課長まで行く號外はほぼ讀まれ

書置は意外な人に金を分けとか、道で石を蹴つて歩くとか、兎に角、男の畑の作品ですわ。

路郎＝男性的と云へば、もう二十年あまりにもなるかな。鯉峯と云ふ女性川柳家があつたが、句會の歸りに一うちへ寄れへんか。ビールでも奢るで」といふ凄さまじさで、句も男性的だし、雅號も鯉峯だし、おそらく句會で見るまで女と思つてゐた人はなかつたやうだ。幽香里さんも鯉峯さんも職業婦人だが職業婦人だから、あながち男性的な句を作るとは云へない。最近、亡くなつた久子さんの句に

春の柄母の好みを入れて買ひ出の丘まんまるい月

が欲しいと云ふ句があるからなア。

蔑乃＝安價なセンチメンタルに流れることだんな。

路郎＝女性でなければ、詠めないやうな句をもつとドシ〳〵發表して欲しいネ。

蔑乃＝そう云ふ事は、難しいな。

路郎＝難しいには違ひないが、そんな句を目指して努力する必要はあるだらう。女としての眼が別にあると思ふがネ。男に引き摺られて、男と同じ角度で物を觀なくて、女は女の立場から觀れば、まだ〳〵開拓すべき處女地が殘されてゐる筈だ。例へば嫁と姑の問題でも、今までに詠まれた句は殆んど男の眼に映つた嫁と姑の句だからネ。

蔑乃＝嫁と姑の句で、今までに詠まれたのは、どんな句か知らぬが、今の女が詠めば、モツと物凄いのが出るかも判らない。なんしろ、嫁入りするのでもつひ先ごろまでは姑さんのあるとこひへは行かぬと云ふてたのが、近ごろでは姑さんのあるとこへ行きたい。その譯は姑を使ふつもりだそうな。そういふ世相やから……

路郎＝さあ、その物凄いのが詠んで欲しいのだ。必ずしも反抗を意味したものを註文してゐるのではない。女でなくてはと云ふ意味をよく考へて欲しい。

（路郎筆記）

同舟近詠

白毫の電髮に似たオン頭　松山　前田五健

白毫に見惚れ拜觀蹴つまづき
白毫へ勿體なくも値ふみする
南無觀世音白毫に止る蠅　金澤　安川久留美

十五錢の烟管にバットすふも春
いにしゑの鋏に桐の紋うてり
朱の墨を忘れ恩給忘れかね
筆五本みな役立たず佗住ひ　兵庫縣御影町　長崎柳秀

角帽を坊やにきせて笑ひ合ひ
嬉さを心に抱いて蹴つまづき
ともすれば年かさと云ふ得手勝手

停年退官雜詠（十句）

停年は掃除婦までにをしまれる
退職は逆ふことの損を知り
停年の心置きなく櫻見る
停年のなに憚からう猪口の數
位人身なぎゝ停年をだてられ
こせ〳〵と云ふて恩給いやがられ
惜別の辭に退職の眼は光り
恩給の生活煙管の良くとうり
恩給の生活疊に居て疲かれ
停年のこれから親の金で生き　今治　長野文庫

お米屋さん等とは餘り現金な
子を持つて女の强さ底知れず
忙がしいあきんど自棄に子を叱り
ませた口母親見れば繻子の襟
愛も亦國境あるか解消す
やゝあつて返答をする田舍の子　神戸　潮田明坊

生意氣なさかりタオルに赤交る
新刊書映畫は已めにして戻り

老母の看護をうけて

氷割る音に目覺めて氣がつまり
買ひ溜を憎む心の買ひはぐれ
見榮すてゝいつそ氣樂な小倉服
連れが來て母の襷が氣に入らず

路郎先生より病氣お見舞狀を頂く

これ天言ズボラを發揮せよとあり
蠅たゝき持つて下僚に對しけり　下關　多田市多樓

春先のほこりへ立つも食ふ爲めか
賴母子を無理して掛けて借りあるき
窓に月入りて何時かの戀を追ひ

武玉川四編研究（七）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

(154) **ちろりにて心安きをさかなにて**

塵山＝酒の肴には土器の味噌。

東魚＝チロリは獨りちび〳〵やる簡素な趣味生活の道具である。靜かに酒を樂しむ趣がうけとれる。

省二＝私は客には、――（自分はのまぬのたが）――ちろり許り用ひて居るが。德利より落ちつきを覺ゆる。

(155) **入齒してからロもからくり**

省二＝技工の進歩した今日の總入齒などをみても、からくりの感しが深い。口もからくり體もからくり。

塵山＝目分もこれには閉口してゐる。

東魚＝「口もからくり」は面白い。都合のよい事をいふ方にも云ひかけてあるやうに思ふ。

(156) **溜息をする女房はうたかはれ**

省二＝心地よき時に溜息などは勿論出ぬ。女房が夫に疑はれ尋ねられる。

東魚＝何か夫に云はれぬ苦勞があるのであらう。

塵山＝異議無し。

(157) **乞食めと心てねめて京を出ル**

省二＝古川柳は京及京の人を餘りにも良く云はぬ。「極くしはい」などを詠む。「立退て京ほど怖い所はなし」（武、五）などともある。此句の作られる所以。

塵山＝「乞食め」と、心中で罵倒したのが面白い。

東魚＝京の知り合ひなどの待遇を、不滿に思ふのであらう。

(158) **双六の戻る箱根に髪かとけ**

省二＝箱根へ戻る目が出たところで、髪がとけて話もはづむ。――髪がとけはモット強い場面か。

塵山＝「髪が解け」は、話がはづむのではなくてそろ〳〵眞劍になつて、勝負を競ふのだと思ふ。

東魚＝眞劍になる方であらう。尙、關所で女の髪を解き取調べるのにも、匂はしてあるやうに考へる。

(159) **かはゆかられの憎かられもの**

省二＝餘り可愛いがられると、他方では憎まれ者にされたりする。

塵山＝社長に重用されると、同僚に擯斥される。

東魚＝妾にもあてはまりさうに思ふ。

(160) **狸を驚す寺の大鍋**

省二＝大鍋をみては狸も不思議で、氣味惡るがらう。捕へられたら煮られてしまいさう。まさか寺の者が狸を喰べもしまいが。

塵山＝茶釜では陳腐であるが、大鍋を配合した點に新味が有る。

東魚＝吾々が土工部屋附近などで赤犬をみかけると、鍋へ入れられるよなど〻戯談をいふ。狸め捕へたら此の鍋だぞ――寺男などが戯談にいつてゐる。ひそんでゐる狸に聞へよがしに。可笑味の句。

(161) **棒ほとに師匠の咄はたらかす**

塵山＝棒の師匠が、其業に長けて居ても、元來の訥辯であつて、他人との對話が、十分に出來ぬ。

東魚＝お針の師匠であらう。針子の噂咄を棒程にしても、師匠の氣を知つて居る連中は、又始まつたで、受入れられないと云ふのであらう。

省二＝棒の師匠の句だと思つてゐた。

(162) **柳か錢に成と元日**

塵山＝餅花に作られる柳の枝は、歳暮に伐出されるのであるから、それが錢に換へられると、やがて元日になるのである。

東魚＝削り掛にしても、弼杖にしても、新春は柳を用ふるものが多くある。

省二＝お說通り。餅花の句一つかく。「目出度さは柳に米の花がさき。」

(163) **ミそれにも雪にも黑い小袖着て**

塵山＝遊里に通ふ嫖客の服裝であらう。

東魚＝浪人ものが一張羅の、古小袖を着て居るやうな氣がされるが、如何であらうか。

省二＝私も最初は浪人者と解してみたが、たゞ夫れ丈けでは、內容が貧しいかとも思ひ、廛翁說の如き場合に迄、考へ及ぼしたのではあつたが。

(164) **びつしよりぬれたうへか念佛**

省二＝びつしより濡れ、雨宿りの上でお念佛。

塵山＝富士道者の掛念佛でゝもあらう歟。ぬれたのは行衣の汗歟。

東魚＝法華馳け込む阿彌陀堂ではないが、夕立に逢つて堂へ馳け込み、やれ〳〵南無阿彌陀…と云ふやうな場合ではないか。（原本「び」とあり、よく見たれど刷りたるものらし）

省二＝家藏本も同樣「び」と刷らる。

(165) **惡るかたく突く棒は下戸也**

省二＝下戸丈けに、惡堅い勤め振り。

塵山＝袖の下から酒代を遣つても、突戻して受取らず、自己の職分を遂行する固親爺ならん。

東魚＝「棒突の醉はれたとこは盛り直し」など〻云ふのと、反對の者である。

(166) **語りに來ませ飄這ふ門**

省二＝話においでなさい。飄のはつてる家です。で、主の人となりが知らる。

塵山＝「我庵は三輪の山本戀しくば訪ひ來ませ杉立てる門」といふ古歌をとつたのである。

東魚＝左樣であらう。氣安い氣分は出てゐるが、チトいや味に思はれる。

(167) **鷄か啼てもおれか世の中**

塵山＝鷄が啼かうが、夜が明けやうが、情緒纏綿として盡きぬであらう。

東魚＝「おれが世の中」といふ句法に、前說の樣な感じが受取れぬ。我儘者の跡取り息子が、朝起き出もせぬとの場合のやうに思はれる。

省二＝道樂息子かと思つてゐた。

(163) **明星に追おろされし凧**

秋の屋＝西天に明星が輝かけば、それに追おろされる如く、凧が地上に下される。

東魚＝あそこ此處の凧が、云ひ合せた樣にみえなくなつて、夕空の靜になりゆく趣が、うかゞはれる。

省二＝少年時を憶出す。

(169) **侍の名にあきるさむらい**

塵山＝武家の玄關に居る、奏者であらう。

東魚＝浪人者が武士を捨て度くなつた場合かと思つてゐた。前說を伺つて否定は出來ない。

ルービヒサア
大日本麦酒株式會社

省　二＝左樣。奏者の役目とはいへ。

(170)　**姉の物着てつんとした貌**

省　二＝妹は少しツンとした顏。（姉が察せられる。）この姉の着物を、深刻に考へると、姉の死を想像させられる。此句の場合、借着だらうか。

壓　山＝姉の衣服を借着して、我が物らしくすまして居るので、姉の風貌を聯想するに及ぶまい。

東　魚＝姉のおさがりを着せられて、聊不滿なのではないか。

(171)　**茶椀を投て立腹を居る**

省　二＝腹立ちの始末に、茶椀を投げたりする夫婦喧嘩は、少年時代に見たものだ。

秋の屋＝朝歸りの亭主に對する、女房の憤激であらう。

東　魚＝名著文庫柳雨本では、「居る」となつてゐる。原本「る」と思はれるが、家藏本の刷りが不明である。それが恰も片假名のエの如く見えるので、柳雨氏は「する」と讀まれたのであらう。

省　二＝私の本も「る」の下半が刷られてないが「る」であるは十分に察しがつく。

(172)　**舟の寢覺の足の伝言**

省　二＝足を隣に突出してゐたのを、眼覺めて知り詫びをいふ。淀川船行に類詠がある

壓　山＝三十石船は動かぬところである。

東　魚＝「の」が三つ重なるので、「寢覺に」としたらと思つたが、矢張り「の」の方がよい事に氣がついた。

(173)　**供の女の息杖を待**

壓　山＝主人が乘つた駕籠の來るのを、供の女が待つといふ意らしいが、其の場合が不明である。

東　魚＝女中が主人の駕籠脇に遲れまいと、一生懸命ついて歩いて居るので、輿丁が肩を替へるのに呼吸杖を立てる時、一寸自分も休めるから、早く息杖を立てゝくれゝば良いにと、待つ心持ちであると思ふ。

省　二＝左樣、供の女が一ト息つけるからだ。

(174)　**走智惠おとこの智惠の上を行**

壓　山＝「走智惠」は何と讀むのか、句意は全く不明である。

東　魚＝才走るなど云ふ言葉があるし、矢張り「はしり智惠」ではなからうか。牛賣り損ふ方ではなく、鋭才男子を淩駕するのであらう。

省　二＝「はしりぢゑ」と讀む。先き走りする淺はかな智慧である。牛賣り損ふ方の智慧である。出過ぎる女の常態である。「手くだの爲に出しけるとは、かしこき神も知らせ給ふまじ、ましてや走智惠なる兄嫁なんどが、何として知るべし」五人女。

(175)　**風薰る小夜着も足の置所**

壓　山＝夏の夜の情景であるが、足がだるくて置所が無いといふの歟。又は、足を投出してゐると涼しいと云ふの歟。

東　魚＝薰風裡の晝寢の場合ではないか。裾へかけた小夜着も輕く、伸び〳〵と心持ちの良い氣分。「置所」は置得て、工合良ろしき所と云ふ位の心持ちであらう。

省　二＝薰風は夏日快晴下に、心地よく吹く風である。足の置所も亦心地よしといふのである。

(176)　**けいせいと言ふては腹を立せけり**

省　二＝傾城などと呼むで、いやな氣をさせ、遂に腹を立たせてしまう。

壓　山＝夕霧を萬歳傾城と罵る、藤屋伊左衛門のやうな客であらう。

東　魚＝心にもなく言ふのであらう。「言ふては」とあるから。痴話の都度には云ふ心持ちがうかゞはれる。

(177)　**坐元の藏を譽るまほろし**

省　二＝芝居の座元の、立派な藏を譽めるのは、寔にはかない事だ。（座元の内輪は判るまいから。）

壓　山＝「まぼろし」とは、立派な倉庫ではあるけれど、何時消え失せる歟。推測する事が出來ないと云ふのであらう。

東　魚＝座元でも仕樣と云ふので、チト山氣がある。藏は立派だが、その内容は既に貧弱に傾いてゐるとも知らずに、あの藏がある樣なら大丈夫だと、譽め信用するとは、眩惑せられてゐるのだ。

(178)　**書く文の耳には雪の音を聞**

省　二＝雪の音を聞きつゝ、松花堂流で、例の三尋程の文（遊女）を書く。

壓　山＝幽居の態らしいが、何の文を書くのか、遊女の無心文などで無い事は、勿論である。

東　魚＝靜かな氣分がうけとれる。人物は遊女ともとれると思ふ。

(179)　**上方を見て死たいに聞飽て**

省　二＝神社佛閣やら見物する場所の多い京坂地方、（京に皇居のおはせし時代の事故）に、一度旅した上で死にたい望みは、老人として當然の事ではあるが、餘り度々言ふので聞飽きる。

壓　山＝東西本願寺を始として、各宗の本山も多くある故、それらを拜みたいのだ。

東　魚＝伊勢詣と上方見物は、どうでも一生一度はしたい念願を、誰でも持つてゐた時代。その京都見物の思ひを、未だ果し得ない老人の繰言、無理ではないが又かと思ふ。

(180)　**戀煩ひを味噌汁てせめ**

省　二＝戀煩ひとは知らず、味噌汁をたべれば、氣持ちが爽つぱりすると、頻りにすゝめる。

壓　山＝戀病とは知る由もなく、あれも毒これも毒とて、只味噌汁のみで、飯を侑めるとであらう。

東　魚＝味噌汁は力がつくと思つてゐるので、すゝめるのだが、どうも色消しな事である。

武玉川四編研究正誤表（一九六號）

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
八八	一	二二	一寺	寸
八二	二	一一	庭	底
		二五	雲	雪

あらゆる趣味のお稽古場
松坂倶樂部
手はじきから奥義まで氣輕く、樂しく、御上達
會員募集
お稽古種目
長常清小鳴
磐唄津元物
箏尺舞八能謡曲樂小鼓曲踊
ピ聲書ア日茶本
ノ樂道道蘭
華料洋俳川
道理裁句柳
氣棋松坂レコード吹込所
學道
川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當
はみ込申御
七階松坂倶樂部へ
電話（代表）三〇〇三番
松坂屋
大阪日本橋

川柳 解題と例句

＝路郎編＝

(12) 大佛

★わが國では奈良の大佛が代表的のものである。太閤と云へば秀吉、黄門と云へば光閑と云つた風に――。奈良の大佛は東大寺の大佛殿にある。

★東大寺は南都七大寺の一で、大日本總國分寺であり、又華嚴宗の總本山である。本尊金銅毘盧遮那佛は人皇四十五代聖武天皇の御本願によつて開山良辨僧正を始め行基菩薩菩提僧正等が同心協力創建された。

★尊像の鑄造は八回に分鑄して出來上つたものである。

★治承四年平重衡の亂と永祿十年松永久秀三好康長の爭亂に殿堂が烏有に歸してゐる。

★大佛師は國中公麻呂で、その祖父は百濟の人で歸化人の孫である。この公麻呂の監督で高市連大國、柿本小玉、高市連眞麿の三人が鑄たのであるそうだ。

★大佛殿の本殿は東西卅一間二尺二寸、南北廿七間四尺六寸、高サ廿六間四尺六寸で柱の數が六十本、一本の直徑四尺から五尺五寸ある。螺髮數は九百六十六個、高サ一尺、徑六寸、蓮花銅座の數は大小五十六枚、高サ一丈、徑一丈二尺ある。

★本尊の寸法は御長五丈三尺五寸、眉長五尺四寸五分、目長三尺九寸、鼻高一尺六寸、口長三尺七寸、耳長八尺五寸、膝前徑三丈九尺、膝高七尺、御手寸法は大指廻四尺八寸、大指長四尺四寸、中指廻三尺二寸、中指長五尺八寸、小指長四尺五寸、無指名長五尺三寸、頭指長五尺四寸、手掌長六尺五寸六分、手掌幅六尺八寸ある。

★大佛の重さは原料の熟銅白鑞を合算して十二萬三百四十八貫四百八十匁で、青銅面に含まれてゐる黄金の量は三百八十五貫百十五匁ある。近ごろの相場一匁十四圓として換算すると五百三十九萬一千六百十圓となる。鎭護國家の本場である大佛殿の本尊を鑄潰して獻金することも考へられないことはあるまい。

★「鎌倉やみ佛なれど釋迦牟尼は美男におはす夏木立かな」と與謝野晶子夫人が詠んでゐる鎌倉の大佛も日本では有名な大佛である。この大佛は釋迦牟尼でなく、手相が所謂定印を結んでゐるところから、實際は阿彌陀如來であると云はれてゐる。その點、晶子夫人の短歌は間違つてゐるそうだ。

大佛へ手を合はさずに出た　紋太
が知れ
大佛へ蜘蛛が驚く風が吹き　莢豆
大佛の脇の佛は忘れられ　万よし
大佛殿へ今日は學者の用があり　枝呂
奈良は雨大佛だけを見て戻り　醉
大佛の下で鉛筆削つて居　雅幽
大佛へ來てまち〳〵の列に　松郎
なり
大佛の裏へ廻るとせむしなり　かほる
大佛を大きなものと云つておき　力好

社の窓（路郎主幹）――絲雨撮影

柳壇の頂點に立つ人

――麻生路郎氏の位置――

高鷲亞鈍

※

川柳職業人とは、川柳人にして川柳家を言ふ。川柳人とはヒューマンであり、川柳家とはエキスパートである。川聊人はそれ故に當爲であり、川柳家はそれ故に存在である。この二者を現實存在的に解釋する者が川柳職業人である。

×貴方は川柳をおやりやそうですね。

A、えゝ趣味でやつてます。

B、私の道樂でしてね。ポケットマネーで雜誌まで出してますよ。

×ほー、それや感心。それで貴方は生活してられるのですか？

B、否や、どうして私は金持の坊ちやんではありません。私の本職は廣告業ですよ。

右の會話にあるA氏やB氏の答へは川柳人の答へであつても川柳家の答へとは言ひ難い。

但しB氏の場合で本職が、廣告業者であつても、會社員であつても、親ゆづりの運送屋さんであつても、それは同斷である――僕は川柳で生きるのだ。そして僕は川柳で生活するんだ。趣味や道樂で雜誌を出すのと違ふぞ。

數年前、斯く絶叫して起つた人があつた。この腐敗墮落した川柳壇に、日蓮の如き聖なる熱と魂をもつて爆彈宣言した彼、麻生路郎！　これぞ唯一の川柳職業人であつたのである。

※

人間の祖先は類人猿の親類だなどと遡つて考へる人は考古學者であり、人間はもと〳〵アミーバーであると考へた人は生物學者である。人間とは生きつゝあり死につゝあると思考する人は論理學者であり、人間其自身を究明する人は哲學者である。結局人間をハイポセシスに思考する人は詩人であり、宗教家であり、哲學者でもある。

即ち、川柳を考へる場合も同樣であつて、吾々は川柳を一般概念として誰でも抱いてゐる川柳通念の、その假設としての川柳を思念することに於て川柳人は詩人であり、宗教家であり、哲學者でなければならない。

今少し右の說明を例をもつて解いてみやう。

※

例へば角力といふものは、誰でも判つてゐる國粹スポーツの一種である。然し角力道といふことになれば、何が角力道であるか誰にも判らない。少くとも角力取りでない吾々には漠として判らない。だが双葉山だつたら判つてゐさうである。何故なら彼は角力の玄人なるが故に。

しかし玄人必ずしも角力道が判つてゐるかといふ事は疑問である。角力は具象的であるけれど、角力道は抽象的だから。

ところが、番付では横綱、大關、關脇、小結までいかないがインテリ笠置山だつたら角力道といふものを何か知つてゐさうな氣が僕にもするのである。

つまり、彼は、角力を假說としてみるところに彼の角力理論が成立するのである。論理が概念の集積と類推であるなら、彼の思考は其故に哲學的ならざるを得ない。哲學する根原は何かといふと、ある種の詩人性である。

※

所謂、川柳職業人ならざる川柳人は總て川柳の素人である。アマチュアの川柳は趣味であり道樂であり、それは何處までいつても旦那藝でしかない。それは單なる川柳それ自身の現象に滿足してゐるからである。淨瑠璃が面白いからといつて淨瑠璃を、將棋が面白いから圍碁が面白いから、角力は愉快だからといつては、それら、ことぐさに手を染めるのと同じで、それは藝人が藝道を、將棋や圍碁の名人が、盤上に全身全靈を捧げて勝負を賭け、名棋譜を殘さうと努力するのや、双葉山が角力道のために夏場所を休場したりする悲愴な眞劍味がない。川柳人にしても亦然りである。

※

川柳職業人ならざる川柳人が素人であるなら、川柳職業人は玄人である。故に柳壇の第一人者、川柳職業人たる麻生路郎は日本で唯一人の川柳の玄人である。他の世界で玄人と稱する者

(13) 紋付

★衣服に紋をつけることは八幡太郎源義家が始めだと「慈照院實錄」に書かれてゐる。それより以前には紋を車に畫いたものである。これは從者が他主の供人と紛れないために從者の衣に車と同一の紋をつけたのに始まると云はれてゐる。要するに一見して何人に屬する供人であるかを明らかにするため衣に紋を畫いたのである。

紋なんかどうでもよいと借りに來る　逸錢

五ッ紋床を背中にして坐り鹿の子紋付の袂から出た黒の石　曉童

紋付に職人の型つゝまれず　章泉

提灯と花嫁同じ紋で下り　一斗庵

萬一の傘を紋付持つて出る　冬眠子

暖簾別け紋付も出來妻も出來　勇宗

紋付の政黨ゴロとより見えず　一風

紋付で來た妹を客にせず　春秋

人次第で着る紋付は包んで來　波人

仲のいゝ藝者の紋は同じ蔦　蒼梧樓

紋付が殖えて屏風の位置を替へ　不越

隱れたる川柳作家の話

福田山雨樓

『大藏大臣をしてゐて亡くなつた○○さんと大學當時同窓だつた方ですがね。川柳がすきでかなり澤山句を遺してゐられるのです。昨年夏亡くなられたので未亡人が偲び艸を出したいと云はれるのです。川柳になつてゐるかどうか一つ見てあげて下さい。』

と同僚の日君から頼まれたので、こんな事はめしより好きな小生、早速拜見した。

仲々澤山の句である、千句からの數である。やつと五十句ばかり選ぶことが出來たので、簡單に二、三の所感を述べて見たい。

○狂句がかなりあつて、その狂句としては相當うまい句が多かつたこと。このことから考へて有識階級にも川柳と狂句を混同してゐるものが未だに少くないと思はれる。

○選んだ五十句ほどの中から「川柳雜誌」へ發表してもいゝと思はれるほどの句は僅々六句か七句位のもの。これは即ち自己派で川柳を作つてゐるのでは駄目だと云ふことになる。

○時事吟が多かつたこと。旅行や來客の折にふれて作つた句も多かつた。即ち即興詩としての川柳の特質はこゝにも語られてゐた。

○隱れたる川柳愛好者に川柳專門誌或は川柳に關する書籍を讀ましめる樣、積極的な働きかけをする必要のあることを痛感した。沖に漕ぎ出して釣る用意が必要だと思つた。

でも、その現象としての將棋、角力、に捉はれてゐる限りは、その世界にあつてマンネリズムに陷るか衰退するほかない。現在の川柳でなく、川柳とは斯くあるものとする假設を置く詩人にして、川柳の生成發展がありその普遍性も可能なのである。其故に、川柳職業人は即ち詩人の創造性を持つ。幸ひにも吾々は、唯一の川柳職業人麻生路郎が、詩人であつた事は柳壇にとつて瑞喜してよい。

斯る川柳職業人麻生路郎を盟主とする吾が「川柳雜誌」の日に次ぐ隆盛は寧ろ當然であらう。それは川柳國技館でさへあつたからだ。

※

僕はヨルダンの河邊に立つて野に叫ぶバプテスマのヨハネの如く、嘘て來る救主キリストをそれは川柳壇のキリストを豫言する。實にそは麻生路郎その人であると。彼の存在たるや現今川柳壇にあつて荊棘の道であり、然し乍ら、最も光榮を擔ふ貴重なる存在であつた。

※

最後に川柳壇なるものに就て一言述べる。凡そどの世界に這入つても素人の集團をもつて斯界とは言はない。文壇は小說で飯を喰つてる文士によつて、畫壇は畫で飯を喰つてる畫家等の玄人によつて形成されてゐる。

一時間五錢か十錢拂つて街の將棋集會所や、玉撞場へ行く連中が決して將棋大成會や、撞球界を言爲してゐるのではない。同樣に川柳壇で、二十錢や三十錢の木戸賃(誌代)を拂つて、投句する者や、酷いのは、木戸賃も拂はないで、書店で立讀みして、ロハで投句して尙、己れは川柳家でござい。川柳人でございと收まりかへり、而も、さういつた奴らばかしで殆ど川柳壇を形成してゐるのが、現在の柳界である。

それは決して眞の意味での川柳壇とは考へられない。極論すれば、現在川柳壇なるものは存在してゐないと言つて可い。將棋集會所、例へば大劇地下室のあの盛大な集會所の如く、その道の素人が集つてゐるに過ぎないのではないか。

眞の意味の川柳壇は、川柳職業人ばかりによつて形成される可きである。麻生路郎氏の如き川柳職業人が、他に一人出來れば、二人で、二人出來れば三人で形成するものが川柳壇である川柳人協會とは、凡そさう言つた人達の横のつながりを企劃したものではないかと私は考へてゐる。

故に本當の川柳壇は麻生路郎をもつて始まるものである。

※

麻生路郎以外の川柳家は川柳家と自稱する勿れ、川柳人と自稱す可し。今日以後、私は川柳を愛好してゐる單なる素人ですと答ふ可し。さもなくば私は川柳の、否麻生路郎師を通じて川柳の求道の士ですと答ふ可し。この場合の川柳人は良識があるとみて可い。

岩佐醫學博士　實驗創製

新強力發毛劑

本劑は岩佐博士が知己氏の薄毛の上に、脫毛の甚しいのに同情し、處方特製され効果が顯著であつたので一層の改善を加へ同憂の士に頒つこととなつた新強力發毛劑である。

▼本劑は老若を問はず、毛根さへあれば必ず毛生(發毛)す！

▲人體發育上、今が尤も旺盛の時季この好機を逸する勿れ！

毛芽の効果は一日に一、二回の塗布にて約十五日位にして新に生毛の如き毛髮を生じ、漸次太くなりて薄毛を治し、脫毛、白髮を防止します。但し毛根なきはげには効果ありません。

定價三〇瓦入　三圓五十錢

大阪府下濱寺町舟尾

小川屋本舗

大阪市西區江戸堀上通二ノ四六昭和ビル

お取次　川柳雜誌社(振替大阪七五〇五〇)

(前金で御註文になれば現品を本舗から直送させます)

川柳横町

★二つの對話

東魚の息子「酒の値が上がるんだッて、お父さん、いゝかい」東魚「いゝも悪るいも仕様が無いぢやないか」（去年の話）

東魚の息子「金魚が泳ぐんだッて、いゝかい。お父さん」東魚「いゝも悪いも仕様が無いぢやないか」東魚は矢張り飲んでゐる。（今年の話）

★黒柿の矢立

大研子が稲荷祭に、柳友を招いてビールをボン〳〵景氣よく抜いた。——飲ませておいてさて云ひと云ふ古句通り大研子が中座したサテは奉加帖でも取りに立つたのかと思へば左にあらず、次の間からウヤ〳〵しく運んで來たのが多年苦心蒐集の矢立。長州の家老が持つてゐたと云ふ定紋付きの矢立、士分の矢立、町人の矢立、大工の矢立、樵夫の矢立と次ぎから次ぎに披露に及ぶ矢立の數がザッと合せて百數十本。中にも黒柿の矢立と云つば一寸類の無い逸品である。「コレ三百圓で賣つて呉れ」と云ふ人があるが、そう聞くと賣れんでなと、それから蒐集苦心談を一トくさり。

★桐の木物語

不朽洞の庭の一隅に、鮎美に見せたがつてゐる蒼々とのびた桐の木が一本ある。昨夏、斗風が尼崎の中馬病院に入院してゐた時、鮎美の案内で路郎と葭乃が見舞に出かけた歸り、鮎美、路郎、葭乃の三人が露天の植木市へ氣紛れに這入つて見た。一人の男が三尺高いところに上つて尺餘の桐をふつてゐる聲が夕闇の空に響いてゐる。

路郎が買おうぢやないかと鮎美の耳に囁くと、鮎美が心得て、披講の名調子で「さんじつせえん」と一ト聲入れた。……が落ちなかつた。

鮎美と前後して、路郎が「に、じう、ご、せ、え——ん」と叫んだ。ところが、ふり手は「よしッ」とばかりにこれに應じた根を藁で包んだ桐の木が路郎の手に移つた。路郎は一寸得意だつた。どうだ鮎美と云つた顔で鮎美の方を見た。五錢高値の鮎美は、彼の透き通るやうな聲の名調子が、ふり手を動かし得なかつたのを甚だ遺憾とした。

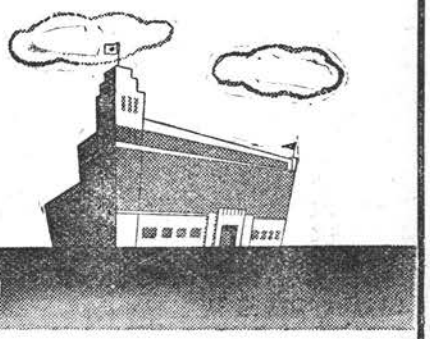
その桐の木にも秋、冬、春、夏と一年の月日が巡ぐつて今では倍以上の背丈けにのびてゐるのだ。路郎は庭の桐の木の前に佇むたびに、斗風を思ひ鮎美を想ふ一つのパズルのやうに瞑想に耽つてゐる。

★忙しいわけ

小松園が忙しい忙しいと云つて句會へちつとも顔出しをせぬので、心配し出した白柳子が訪ねて見ると「近ごろは區役所通ひで忙しく、まるで代書みたいだんね。お祖母さんが亡くなつて、赤ん坊が生れて、弟が應召したのだす」との話。これを聞いた白柳子、悔みやら、よろこびやら、お祝ひの言葉に、ドキマギして、なるほどこれでは忙しい筈だと同情してゐる。

★吟行のお土産

普天は吟行の歸途、鰈に、マッチに、立杭（丹波特有の德利？）を土產に持つて歸つたら女房がよろこんだ。いかにも世帶じみてゐておかしく候と云ふ葉書を寄越したが、路郎や美根子はまだ其の上を行つてお櫃を買つて歸つた。



時局下に 相應しく 最も眞摯なる
百貨配給機關として その使命の
達成に邁進致して居ります

大丸
大阪心斎橋
月曜休業

一路集

募集句

國境

啞三味選

國境をスパイ易々越えて來る　愛鳩
國境を出てからスパイ服を變へ　小雅子
國境を越えたる戀をもてあまし　靜波
國境で曰くありげな人に逢ひ　二乙坊
國境の上で入道雲くづれ　巨人
國境の向う人情に飢ゑし人　市多樓
國境の向うも茫咲いてゐる　葉光
雲どけへ國境線のあわたゞし　芳郎
國境は變哲もない枕が立ち　嘘川
國境を過ぎて變らぬ山の色　抱逸
歸還してその國境を齒痒がり　南濃路
世界地圖國境線をまた直し　彌生
國境へ銃の手入れが行屆き　風來子
敵兵の春のんびりと國境　孤舟
國境は冬の流れの幅となり　水客
國境を今越えてゐる車窓の瞳　みづほ
銃眼の向うに國境かすむなり　同
國境があつていさかひ絶えぬなり　九披
國境の月あまりにも冴えて居り　同
全機無事國境の空夕映える　水虹
銃口を前に國境春であり　同
(五)國境の銃眼に見る白い花　風來子
(五)立哨の眼に國境があるばかり　青風
(五)讃美歌が暮色にとける國境　葉光
(五)國境の土盛りあげて墓標建て　芳郎
(五)國境は視察の指の先にあり　風葉
(人)列車いま國境へ來た音になり　みづほ
(地)砂塵まくところ國境線があり　風來子
(天)塹壕を掘る敵かすむ國境　青風

枕木

某人選

出征車がゆく枕木の軋みやう　青風
枕木のこれから先が山陽線　靜波
枕木の霜で天氣を豫想する　巨人
枕木もさら山里へ汽車がくる　水客
枕木の弛みか汽車の搖れること　翠芳
きつちりと歩幅に合つた枕木　凶人
月へ影落とす枕木霜があり　市多樓
枕木もしまり開通待つばかり　芳郎
枕木へ驛の櫻が散つて來る　小雅子
枕木の山にも日の丸立てゝあり　九披
枕木え晝餉と並ぶ線路工　照波
枕木を踏んで檢使の顔も見え　白鷗
建設へ、下積となる枕木　彌生
枕木をかぞへて工夫驛へつき　利夫
大陸へ枕木となる氣で渡り　辰氣樓
枕木は水に浮くよな色でなし　葉光
決心がつかず枕木ふんで行き　愛鳩
枕木のバラスへ嘴の揃ふ音　神樂
枕木へ汽車は無氣味な音を立て　翠葉
枕木へトロ押す土工枕の汗　久人
むき出した枕木市電徐行する　己之介
枕木を一本替へる歌を出し　風來子
通過後の枕木依然たり依然たり　同
枕木はある日自殺の血を浴びる　みづほ
軍需品の重みと枕木心得る　同
枕木の山へ上手に子が登り　風葉
枕木の角へ蝶々が來てとまり　同
(秀)枕木の下に吸ひ込みそうな淵　己之介

柳川

二千六百年史（六）

戸田孤蓬

明治時代（二）

○地方自治制しかる（二五四八）
國會開設を前にして市町村會がひらかれる事になつた。
その自治をきゝに庄家が町へくる
テーブルが來るまで村會はじまらず
村會は先ず氏神の事を議し

○憲法發布（二五四九）
明治二十二年の雪に淸められた紀元節。此日待望の憲法發布さる。晝夜の祝賀行列。
二重橋前で假裝の帽をとり
大憲章出來た歴史も讀んでみる
滯納の店子が憲法讀んでくれ
權利だの義務だの覺え十八九

○鹿鳴舘時代（二五五〇頃）
外に向つて條約改正をせまるには毛唐らしい生活ぐらい出來ねばと滑稽な歐化時代がはじまる。これも過度期。
煉瓦だけは日本の窯で燒け
羽織を着ても異人は異人なり
コルセットはめて和製の千一夜

○教育勅語下賜（二五五〇）
日本人教育の指導原理。懇切に御さとし給はつた御言葉そげに古今東西を通じて誤らざるものであつた。
すめらぎの道　中外にほどこさん
棒讀になれて校長らしくなり
謹解の挿畫を大家引きうける

○帝國議會開かる（二五五〇）
議論の議論になるもの、過激なもの、口ごもるもの、議長もやゝこしかつた事だらう。しかし覇氣があり、活氣があり。解散が屢々繰返された。
立憲の一年生がよつてくる
代議士の思ひ出にある保安令
開院式只堅くなり堅くなり
登壇をしたがドモつてばかりゐる

○對英條約改正（二五五四）
人形落しの一番端から一つゞゝ落してゆく樣に條約改正の目標はようやくその一角からくずれはじめた。胸に一物ある英國がその先棒をかつぐ。
一人歩きまだ〳〵遠いものにされ
算盤を彈き云ひ分少しきゝ

○豐島海戰（二五五四）
日淸風雲急なる時後の東郷元帥が支那兵を滿載した英國汽船高陞號を擊沈して男をあげた一幕。それから間もなく國交斷絶となつた。
切腹を覺悟て擊つた彈のあと
辨髮をつかんで二人とも沈み
信念の前にユニオンジヤツクなし

沈め得くときまり東郷さんを讃め

○日淸開戰（二五五四）
眠れる獅子は目覺めなかつた。世界人が蟲眼鏡で覗した日本がグン〳〵大淸國を壓迫していつたのには全くびつくりした
黄龍旗口程にないだらしなさ
夏草の間に玄武門低し
一番乘り號外になり劇になり
大本營冷えたお火鉢一つきり

○丁汝昌自殺（二五五五）
支那人は東洋人である。威海衛に部下の北洋艦隊を全滅におちいらしめた司令長官丁汝昌は自らを殺して部下の助命を請ふた。
軍歌になるその水兵も一人居り
日の丸の見えぬ所で遺書をかき
孔孟の敎汝昌は毒をのみ

○下關條約（二五五五）
日本はじまつて以來の大戰のあと仕末が下關に會した兩國委員の間に行はれた。小山六之助なんて亂暴者が李鴻章全權を擊つて國中に迷惑をかけたのもこの時
三拜九拜口を開くと負けてゐず
支那服が少しはみ出す蒔繪椅子
沒法子繃帶のまゝ印を押し

○台灣平定（二五五五）
外領の割讓をうけたのもこれが初めてで、北白川宮殿下の薨去は申すもかしこく。この時よりはじまつた理蕃工作大正年間に至つてようやく一段落になつた。拓殖又難いかなである。
常夏の丘にやんごとなき御靈
生蕃の子供君ケ代よく覺え

○遼東還附（二五五五）
臥薪嘗膽は支那だけの言葉ではない。露獨佛が日本の血の代償へ横槍を入れる。今にみろ今にみろと日本人の全てが逆境を眞劍に味つた。
背丈なほ足りないことをくやしがり
嘗膽と大きく書いた極樂圖

○改正條約實行（二五五九）
日淸戰後條約改正の多年の宿望が達せられて居留地の名が消えた、內地雜居となる。
支那に勝つジヤパンと云へる國はどこ
異人さんが隣り借つたと云ふ噂

○北淸事變（二五六〇）
支那の實力がわかつてみると、いたづらにこはがつてゐた西洋人の野望は急激に膨脹した、それに反抗したのが義和團の排外運動。日本はじめ列國が出兵して之を鎭めた。
眞先はいつの時でも日章旗
首府にしてなほ支那人が締め出され

○日英同盟（二五一六）
ロシヤが極東に於ける英國の權益と衝突しようとする。ジョンブルは新興勢力として日本をマークする。人のよい日本人は一寸よろこばされたものだ。
番犬につかふつもりの握手をし

○日露開戰（二五六四）
はたしてロシヤの鋭鋒は日本と眞正面に衝突した。軍首腦は知らぬ事國民は負けるかも知れぬこの戰を勝たずにはおかぬ決意のほぞを固めた。
銃をもつ決意で首相立ち上り
幸先はよし捷報が先ずとゞき

○旅順陷落（二五六五）
やつてみると連戰連勝。ロシヤもさるもの。日淸戰爭の時只一日で落ちた旅順に半歲を費し、幾萬の生靈をさゝげ、上下心痛する。
決死隊今日も何人いつたきり
肉片きのせてボートは歸りつき
白骨へ旅順のみえたことも云ひ
戰がすめば恨みのない二人

○奉天占領（二五六五）
全陸軍が一戰場で最後の決戰をしたのが奉天戰。しかし兵力武器の不充分は捕促殲滅とまではゆかなかつた。
長蛇を逸すたゞ彈が來ず兵が來ず
クロパトキン又も豫定の退却し

○日本海々戰（二五二六）
人間が機械を動かし軍艦を動かす。上手下手があり。詩も生れる。「敵艦見ゆ……」から「皇國の興廢……」をへて「天祐神助……」を以て戰果を報告するまで一聯は殺風景な武人の戰ではない一個の藝術だ。
七段のかまへ次々沈められ
白旗をずらりもう海風いてゐる

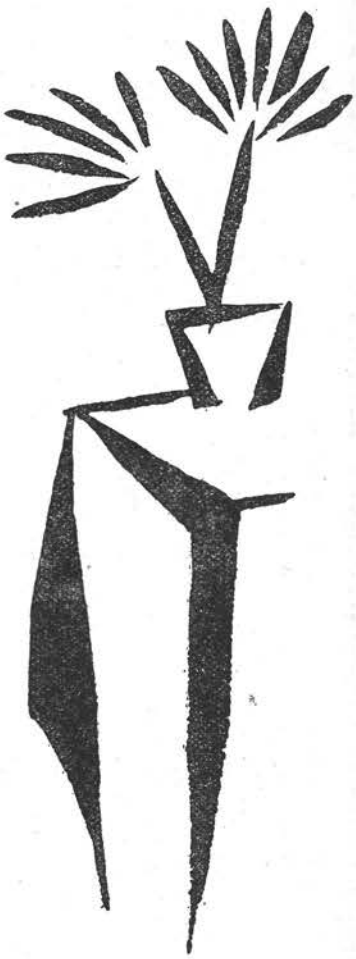
○ポーツマス條約
力一つばい戰ひきつた日本と膏藥張をしたまゝで生きてゆけるロシヤとでは餘力のある方が無理を云ふ。小村全村が死を覺悟して會議の歸途についた心境は悲痛だ。
勝負けと別にヤンキー出迎へる
書置をかいた上陸一歩前
燒打をきく官邸の窓くらし

○日韓併合（二五七〇）
建國以來の朝鮮問題が解決してキーサンもチョンガーもそのまゝ日本人になつた。
長きせる彼も一人の日本人
日の丸の寸法チョンガー聽いて去に
博文寺月見草などそなへに來

○明治天皇崩御（二五七二）
昔は知らず今まのあたりかくも偉大なる聖天子の御偉業をしのぶ時全國民の涙はいつかはくとも見えなかつた。
玉砂利が今日も明日も泣きぬれる
大八洲半旗にくもる夏の朝
あゝせめて追腹をして御供せん

近作柳樽

麻生路郎選



前線の五勺へお國自慢が出　神戸　大田豊和
討伐行髯の氷柱へ笑ひ合ひ　同
顎出して行く兵の跡道白し　同
敵の居た壕に野菊が震へてる　同
作戰の山にポツカリ月が出た　同
米來たと籠城願を空へ向け　同
快々的傘と饅頭忘れずに　同
友を燒く火は赤々と飯も炊く　同
ありつたけの身振りは捕虜の命乞ひ　同
城壁へひゞく砧も春のもの　北支　月原宵明
杏滿開敵がゐるなり　同
兵隊の暮しを鳥みてゐたり　同
儲けずき使ひすぎてる現地人　同
忠魂碑神々しくも暮れんとす　同
五月五日〇〇城の鯉幟　同
二時間で乾くと暑い事云はず　同
アカシヤの蔭で洋車あぶれてる　同
風邪に寢て頼もしくみる子の元氣　京都　大照演算子
女教師の方がきびしい女學校　同
おしやべりが今日は涙を見せて去に　同
一人ぼつちの向うも此方むいてゐる　同
三等車まんまと席を取つた顏　同
同窓會先生の綽名にさんをつけ　同
令狀の着いた時から擧手の禮　同
夜明けかと思ふ齒痛へ二時がなり　同
面會のトンビから出るゆで玉子　臨時大津陸軍病院　酒井美知夫
看護婦さんも女なりよく笑ひ　同

休暇に歸りて（二句）

こはれてるものばかりなり玩具箱　同
座ぶとんに坐る日本はよいところ　同
戰爭に待つたはないぞ王手飛車　同
演藝へ軍醫も笑ふ顏となり　同
腕すもふ役立つ方の腕でくる　同
戰友へ戰地へ濟まぬにぎり鮓　同
三十の娘を持つた親心　和歌山　久樂改め　秋月宏方
貞操を金に見積る身の不運　同
井戸端の話風呂屋でまた話し　同
屁一つで騷ぎし時代なつかしく　同
悔み云ふ事にもなれて老博士　同
養鶏場朝寐の鶏も見當らず　同
寫眞屋の技巧娘の顏は出來　同
漂泊のこゝろ悲しや雲が飛び　岡山　鈴木九坡
金よりも物それよりも人が要り　同
生活へ知性うるさくつきまとひ　同
利殖法上手になつて危機に立ち　同
皮肉られても借りるものだけは借り　同
小の虫殺される身にもなつてみろ　同
令女日記へ十九の春の泣き笑ひ　同
季外れの錠掛けてあり神の宿　豊中　阿部閑生
稅金がさせた入籍とは知らず　同
大鳥居見え靑訓の脚揃ひ　同
兒の眼色醫者も坐つたまゝ狼狽て　同
熱い兒を抱いて夕べのボブラ道　同
子死にて我も屍となりにけり　同

川協のページ

（通信歡迎）

▼三越川柳會天守閣は六月三日午後一時創立滿五周年記念句會を中央公會堂階上で開催される。兼題は「天」「守」「閣下」各三句。

▼全名古屋川柳團は紀元二千六百年奉祝川柳大會を五月十九日午後一時新愛知新聞社講堂で開催した。

▼川柳三昧社には五月五日全鮮川柳大會の懇親宴を雅叙園にて催されました。

▼「塵」出版記念會（齋藤半七著）は五月十六日東京淺草柳橋二葉にて催されました。發起人、壽山。花川洞。空栗。玉兎朗。琴莊。盈光。茶六。太郎丸の諸氏

▼鶴はし川柳社（大阪）では五月十九日、東小橋青年會館に於て同社の顧問、本田溪花坊君の句碑建立記念句會を開催された。

▼柳詩社（佐世保市外）から刊行されてゐた「柳誌」が「戰場人」と改題され、同時に社名も戰場人發行所と變更された。

▼潮田明坊君（川協評議員）には二月頃より御病氣御靜養中のところ、この程大分に御快愉された由御通知ありました。

▼多田市多樓君（下關）の御令閨には門司鐵送病院へ入院された由御便りを受けました。

▼古句研究家塩井梅仙君（東京）は前著柳橋拾遺の姉妹篇として今回歷史の部を刊行された。

▼芝田靈子君（松山）は大阪時事松山支局販賣所へ入所された。

▼渡邊曉童君（松山）松山へ移つた同君は全く健康恢復、大阪時事松山支局に勤務の傍ら、矢野虹之麿君を援けて「川柳伊豫」の編輯に沒頭。

▲佐野友章君（靑島）大阪、松竹に勤務されてゐた同君は五月二日渡靑され日華釀造株式會社に勤務されることとなつた發展を祈る。

▼布施筑川君（大阪）は醫學使節として近く訪獨せられることとなつた。

▼石崎洗塵君（大阪）は北市民病院長に就任された。

▼石原伯峯君（廣島）は嚴父が鐵道病院に入院加療されてゐるので十二日來阪された。

▼酒井美知夫君は殆んど快癒されたので臨時大津陸軍病院から大阪陸軍病院金岡分院へ轉院。

▼長崎柳秀君三月末日に停年退官せられたので藥理學教室の門下生一同が先生を犒ふ會を五月廿六日夕刻から靜觀樓に開催され路郎、水府、虹衣の諸君が招かれて臨席した會するもの七十餘、頗ぶる盛會であつた。

▼麻生路郎君（川協理事長）は六月上旬、廣島へ出張の筈、同市の川雞廣島支部の人々は近くその歡迎句會を開くべく張り切つてゐる。

生きる凄さよ海月（クラゲ）・磯ぎん（イソ）・海丹（ウニ）・海鼠（ナマコ）　松山　山本耕一路
バットの煙よ、唐草模様が上手だね　同
長い塀蟻が小波（サザナミ）描いて行た　同
海の底こうろりころり昆布が掌を振る　同
丸刈になれよなれよと葱坊主　同
一時間後の風景牛が向き變へた　同
女一人嫁ぐところもない世間　兵庫縣賣塚　森本秋子
電髪でいつそ酒場に住みましよか　同
淋しさは虫と遊んでゐる日向　同
櫻草いつしよに泣いてくれそうな　同
吾が涙君の思ひに及ばじな　同
默禱の一分間の長さ知る　大阪　山本葉光
澄み切つた瞳で愛を持ち病みつゞけ　同
買溜めを腐らす初夏がやつて來る　同
母となる女の强さに負けにけり　同
慾のない顏をカメラが知つてゐた　同
君が代をうまく唄つた第二世　大阪　富岡巨人
おみやげへ長男、長女、二女並ぶ　同
信號はちんば娘へ赤となる　同
お父さんの馬鹿野郎と恐がらず　同
破産して引つ越するに日を選び　同
病勢は進むにまかせ新刊書　尼崎　山田南濃路
荒鷲とだけで良緣まとまつた　同
一も二もなく丸刈が好きなのよ　同
二階借早稻田びいきの氣が揃ひ　同
嫁き遲れ略式で嫁く氣にもなり　同
假事務所疊の上に椅子があり　下關　濱田賢欠
あの椅子で一度はペンをにぎりたい　同
台所女中一歩もゆづらない　同
代用品ばかり並んだ春の町　同
買溜の酒は飲ずに死んで行き　同
封筒の奥へしまつた南支の蚊　南支　志野富美夫
內地迄續くか雲をみてゐたり　同
注射器の重き任務と知りながら　同
從軍の記者のカメラにだけ這入り　同
煙草の輪子供の顏になつてきえ　同

轉職を又かと友の笑いたる　松山　芝田靈子
よよよよと絕入る如き母の老ひ　同
驛へ來て尙母なるか云足らず　同
母の手の細きを汽車の窓へ出し　同
シグナルと母の姿と眼にのこる　同
おでん屋の議論位はしれたもの　松山　宮內耕朗
うつかりと出る台灣語笑ひ合ひ　同
征く友の後姿の尊くも　同
征く友のこゝろにふれる母の事　同
葉牡丹へ來て齒みがき粉立ち止まり　同
ババちやんはババちやんはネ神樣よ　山口縣　三原狂路
交叉點そうあわてずに越し給へ　同
口先であやまることに慣れた妻　同
妻も亦久振りなる作句帖　同
音のないアルミ貨氣兼ねして拾ひ　大阪　大瀨戶翠葉
のぼせてもよいと筍老母は切り　同
ブルドック富樫氣取りで門に居り　同
茶の花に圍まれてゐる釣の人　同

想出

角帶でォール握つた中ノ島　同
紫雲英畠唱歌の聲に黃昏る　廣島縣竹原町　西野みづほ
拔衣紋かゞめば灸の痕が見え　同
童謠を唄ひたくなる麥の徑　同
新調の皮切病院行とは淋し　同
肚きめることを急かれて居る弱身　長野縣須坂町　高峰柳兒
轉業のその上海を越へる破目　同
ニツケル貨賽錢箱の地味な音　同
甲種もう大陸を呑む氣焰　同
寶塚八重の櫻が袖に散る　兵庫縣西ノ宮　花柳蘭子
母樣の意見ハ坐る姉妹　同
ハンドバック三人ながらよく笑ひ　同
來る人も來ず日曜を花とゐる　同
梅干の味のみ知つて床に就き　尼崎　小林文月
短篇の夢ばかり見て夜長し　同
迷ひ來しォカズ見る丈けでも嬉し　同
若い醫者ハリを立てるにちと困り　同
手袋を繕る男を笑はれず　大阪　松枝靜波

▼小林文月君（尼崎）チブスの疑ひで住友病院へ入院加療中であつたが、四月廿日退院された。

▼丸島利生君（大阪）腎臟病で阪大病院へ入院され五月上旬、一旦退院されたが加療の御都合で再度入院されてゐる。

▼本誌に連載の「漫畫陣中鏡」の筆者北みきを君が歸還されたので近く漫畫人川柳人によつて同君を犒ふ集りをしたいと思つてゐる。

▼元川柳雜誌社社員竹中顯君（川協正會員）は五月上旬徵兵檢査の結果甲種に合格され、國家の干城を約束される身となつた男甲斐があると云ふもの、同君のため賀詞を呈する。

▼龜田小蛤君は故人と、の約を履んで碧梧桐句集を編纂された。內容は碧梧桐氏の定型律の句を蒐錄されたもの。四六版四百四十七頁、序文は佐藤紅綠・大谷句佛の兩氏定價は參圓五十錢發行所は大阪市東區橫堀二丁目一六輝文館。

★會員を募る

川柳の世界は川柳人が自負してゐるよりも確かに遲れてゐる。これは、徒らに神經ばかり細くて、眞に川柳の將來を思はない人たちが多く、所謂社會に對する認識不足から來てゐるのだと思ふ。川柳人協會は川柳人が一つの橫のつながりとなつて、お互ひに啓發し、斯界の發展を期したいために生れたのである。川柳の愛好者は是非共入會し、來るべき川柳黃金時代の礎石の一人となつていただきたい。會費前金一年三圓（海外一弗）入會申込は大阪市西區江戸堀上通二ノ四六昭和ビル內　川柳人協會（大阪振替三一五一四宛）

中告書かいて淋しい歳となり　同
御無沙汰を詫びに來ましたさくら餅　同

競馬

此の馬にや去年のせつき泣かされた　同
戰爭の話題へ遠く女事務　大阪　永井清彦
赤たすき小使さんとも思はれず　同
丸がりへ召集だつかと感謝の目　同
旅の窓召集令が來てゐそう　同
唾棄すべき男であつて儲けてゐ　廣島　石原伯峯
現實にもろ〳〵の夢くづれゆく　同
煙草喫ふ手つき女給と見破られ　同
算盤に僕の無能を嗤はれた　同
世渡りの事教科書にかいてなし　愛媛縣大洲町　米澤曉明
借家にて候琴の置どころ　同
地理教授茶摘の唄の一節も　同
立膝で先生と飲む年となり　同
枯木にも似て大臣を二度勤め　大阪　岩崎水虹
硬骨の仲間外れに慣れてゐる　同
豹變をした事もある立志傳　同
繩卷いたまんま借家の梅が咲き　同
體驗談笑はしといて水を飲み　尼崎　吉兼りきを
掛金をかけて凡々たる暮し　同
バーマネント二度の破婚とは見えず　同
氣付け藥あるとは酒の事だつた　同
呼リンはボールを庭へ入れたこと　大阪　夷一笑
目に青葉ユーモレスクが聞えて來　同
御命日つばめが飛で來る時分　同
藤の棚名所の雨はしづかなり　同
おゝ君も來て居たのかと國境線　大阪　朝野久人
軍事便漫畫も書けるたのもしさ　同
壯丁が子供に見える齡になり　同
統制へ耐へなん靴の破れたり　同
あれで居て文學趣味かタイピスト　大阪　西田白雨
兩親も一緒夜なべに笑ひあり　同
下宿して宗教がなんのかのといひ　同
逆境へ小さな幸を見つけ出し　大阪　岡田玻瑠
良心のかけらも見せず死んでゆき　同

三男小學校入學

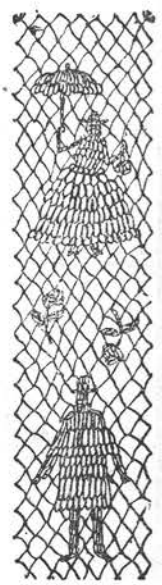
もの覺えよすぎて母は又案じ　同
戰線の懷古にいつか湧く泪　大阪　戸原己之介
征つてきた匂ひが吾にあるらしく　同
缺勤へ目出度い噂立てられる　同
はつきりと云へてオールドミスでゐる　大阪　平川久枝
我利我利をはつきり見せてバスに乘り　同
揚足をとつても孫は賞められる　同
クリークに柳が萠えて平和じみ　中支　藤田義雄
嫁入りの笛なぞ聞え治安成り　同
おさへたりふつたり慰問袋撰り　同

親友山縣久子孃を惜む

三人の仲間早くも一人缺け　廣島　清田田鶴子
うすぶこん寢させられてる足の線　同
墓場にも新綠の色かすかなり　同
君も小供があるかと勇士打解ける　中支　和泉佐賀司
はんごうのうまさへひげが邪魔になり　同
松葉杖嫁に來る娘に手をとられ　同
事變なぞ口に出せない中に住み　布哇　長谷川猿吉
ビスネスが妻の看病より大事　同
ネクタイをめくれば元始其まんま　同
樂隊が聞へて窓へ皆たち　兵庫縣六甲　河內明子
花見酒男同志のさわぐこと　同
寶塚三人でゐてもの足らず　同
偉人傳十錢賣りの中にあり　大阪　山川富士
滿員へ足のやり場を失へり　同
藥瓶大事に持つてバスにゆれ　同
櫻々なんで醉はなきやならんのか　朝鮮金堤　弘津柳慶
酒位飲めよ話が出來ないぞ　同
海に出て心のうさを捨てようか　同
看護婦の一人片親無いと言ふ　大阪　今西湖秋
花吹雪ぬけて金策歸つて來　同
牛車引く肩へ梅の風があり　同
離緣狀握り女工となつてゐる　尼崎　奥田綠翠
佗びしさを工場の中で生きるだけ　同
溜息が机につゞく弱さなり　同
長男は百圓取りの官吏にて　名古屋　鈴木可香

不・朽・洞・會

＝白峯・沒食子兩君を犒ふ＝



支那事變が戰の火蓋を切つてからこの方、兵士は一線に、吾等は銃後に寸隙なき有樣であつたので、互に親睦を計る會などは不知不識の中に忘却されてゐた。

川柳雜誌社からも續々と榮譽ある應召兵士を出した。不朽洞會員市場沒食子君、宮岡白峯君の兩君は三年前、時を同じうして應召渡支されたのであつたが幸にも、再び兩君は相前後して歸還された。二君の武運長久、神佛の加護を會員集つて喜び合ふ事は決して意義なき事ではない。これを機會に他府縣各地方へ移住或は、轉任された會員達も、二日に續く休暇を利用して來阪されたいといふ目論見で四月二十八日午後一時から不朽洞總會を開催した。

會場は中之島の新綠を見はらした茶房グルマンの階下である。階上のアトリエから運ばれたらしい長瀨畫伯の油繪が周圍の壁を飾つてゐるのも落ち付きを見せてゐる。幹事は早くから詰めかけ、控へのテーブルへ陣取つて、次々に來る珍らしい顏新らしい顏へ出席簿をつきつけてゐる。

出席者＝路郎・かほる・普天豆秋・鮎美・白峯・沒食子・史風・白柳子・史路・滿潮・綠雨・翠芳葭乃・丹路・潮花

あつちにも三人、こつちにも五人と、旅先にゐた話やら、無沙汰の譯やらでざわめく外は、小舟が行き往するのも○らしい風景である。

沒食子君と白峯君は一人一人の挨拶を受けるだけでも、なか〳〵忙しい事である。

「お歸りやす、おゝきに御苦勞はん」

これはかほる君の挨拶だつた。簡單で明瞭で、情味のこもつた此挨拶を、しかも粹向きの女達以外には使はれさうも無い此挨拶をすら〳〵云つてのけても板についてゐるかほる君は仕合せな人だなアと羨やむ者もゐた。

テーブルの準備が出來たので、一同定めの席へつく。鮎美君の開會の辭に次いで路郎師の挨拶續いて沒食子君の謝辭の後で、白峯君のテーブルスピーチがあつた。吾々はそれによつて銃後の緊張味を一層に強められると同時に、一線にある勇士達へ滿腔の謝意を表してもなほあまりあるものであつた。

當日の會合に於て、今後の不朽洞會の親睦と發展を期するため、委員長並びに委員數名を設ける事を決議し、其人選は滿場一致で路郎師の指命に一任する

辭めたつて食ふ道のある口答　同

鐵橋の眞下長閑な水車小屋　同

念願はも一人ほしい男の子　大阪　吉川琴聲

女店員三拾迄の顏ならぶ　同

誘惑の言葉へ男迷はされ　大阪　青野笑門

冗談も言ふがやつぱり我師なり　同

淀川の水の流も春となり　大阪　松枝まさき

いのちより大事な手提持つてこけ　同

國難を他所に藝者の派手な春　大牟田　高田抱逸

出征の留守は家政婦やつてます　同

名も告げず去つた献金尊まれ　廣島縣竹原町　梶川芳郎

兄弟の名乘り何から話そうか　同

風吹けば風吹く樣に病んで居る　京都　平岡としを

インフレの貴夫人と見た言葉つき　同

母の死（二句）

美しき詩となる母の臨終　大阪　米谷松太樓

母の死へ世間と云ふを見直して　同

生家いま青葉若葉に包まれて　奈良縣田原町　嶋田翠峯

絶景でのむ水の味酒の味　同

瓣一つ落ぶれた身に迫るもの　瀬戸　佐藤叫史

戰場で死なしたかつた轢死體　同

全機無事歸還大空たゞ青し　東京　田中青風

道を訊く兵隊の齒の白いこと　同

苦笑いして損料は出してくる　名古屋　長谷川可門

損料をこるこ借物はからかはれ　同

激流へジットしやがんだ平家蟹　下關　東方司半球

眞帆片帆みんな馬關へ泊る船　同

菅笠の見よ東海で良く植はり　高知　岩原風味

買はぬ氣は値の張るものも見て歸り　同

叔父の家へ養子に行つたので氣まゝ　廣島縣竹原町　杉原愛鳩

二十五の春はさみしく藥の香　同

握飯こゝにも時局伺はれ　大阪　平井靜男

夏服の裾から落ちた見舞狀　大阪　田所一水

外米へ兵隊さんの話でる　大阪　中西彌生

照國の横綱狙ふ力業　京城府　古川照波

信じきる夫の過去へ一寸ふれ　大阪　金政細泉

待つこましたこ言はんばかりの王手飛車　大阪　並木南風

共稼ぎ稅金だけは納めてる　尼崎　江口正路

かれこかれチト外米のにほひする　高松　揚柳夢

輕い嫉妬ルンペン煙草を拾つたり　大阪　上沼凶人

愛人に草笛聞かすハイキング　大阪　山本清月

歸還兵武勳のひけをそりかねる　大阪　青木茂

飛行塔大人もまじる寶塚　大阪　梅田秀溪

懷手足で起して下駄を履く　大阪　東川春夢

さかづきを伏せてハツキリ降參し　松山　岡田蜃氣樓

外米に母は脚氣の証明書　堺　野島神樂

友の結婚を祝して

細君の三つ指つくを想像し　松江陸軍病院　尾崎綠柳

★

親燕、子燕川端陽が暮れる　鮎美

川端の家へ船から下りて來る　同

川端に掛出しが出て夏となり　普天

買溜めの炭も見えてる川の軒　同

かき船の川面忘れて唾をはき　史風

御寮さん大川端に家を持ち　白柳子

川端は逆光線に水ゆれる　同

川端の家逆さまに搖れて見え　翠芳

川端で日が暮れるのを見てゐたり　豆秋

川そひの窓から橋へ聲をかけ　乃葭

事となつた。なほ來る可き二百號記念事業についても協議された。

二百號記念は時局柄、派出なことは遮けることにしたいといふ路郎師の意思を尊重し、眞に有意義で實のあるものを選ぶとすれば不朽洞會員の句集を出してはと云ふ案が採用され、兎に角嬰て撰まれる委員によつて、內容其の他の研究をなし、その上で各位の意見を徵し、決定してはと云ふことになつたので、單に句集刊行に限らず名案があれば社の方へお知らせを願ふこととした。

當日の會合には新らしい顏ぶれもあつたので豆秋君によつて出席者の一人々々が紹介された。殘念な事には遠方からの出席者を望んでゐたにも拘らず病氣の人や、旅行中の人が多かつたので意外に出席者が尠なかつた。大安と云ふ吉日であつたため華燭の典を擧げられた會員とその緣故者が共に不參の止むなき狀態になられた方もあつた。しかしこれは芽出度い欠席者で席上から祝電を送つて祝意を表した。

不朽洞會員は今後出來るだけ顏を合はしたいといふ希望が出席者の心に期せずして湧いた。そして仕事の關係上、遠距離居住の方もあるが年に一回か二回は開いて欲しいといふ希望があつた。今のところ年一回春季に催してはと云ふことになつたので次期の會合にはもつと〳〵多數出席されたいものである。

「川端」は當日の席題であつたが歡談に時を費したので作句した方は極く小數であつた。

雜誌柳川 六月の句會

——本社の句會は毎月第一土曜——

★

★日時　六月一日夜六時半（土）

★會場　御津八幡宮（電話南八六四〇）
南區八幡町佐野屋橋筋角（木棉橋電停下車東一丁・八幡町市バス停西一丁）

★兼題　「種　痘」（五句）……高橋かほる選
（前月句會の句中より）……水谷鮎美
題未定……北川春巢

★講評　三〇錢（川協章提示の方は二五錢）

★柳話　席題　天位（各題）に粗品を贈る

★會費　潮花・斗風・紫香・双虎・白柳子・里十九

★呈賞　大阪市西區江戸堀上通二ノ四六（昭和ビル）

幹事　川柳雜誌社
電土佐堀三三三三・八一六三・八一四六番

主催

非特異性全免疫元
オムニン
トツメコ

本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。

（適應症）流感、各種肺炎、肋膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、蜂窩織、其他各科、急性、熱性、疫癘性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に渉り著効を奏す。

（特長）注射無痛、副作用絕無、用法簡單、奏効迅速、價格安廉。

（包裝）
1/2瓦管入　1瓦管入
1/2瓦管入　1瓦管入
1/2瓦管入　1瓦管入

發賣元　株式會社黑田藥品商會　大阪・東京

—文獻進呈—

ナカワ●郎一●子光の「中道金黄」

新興京都撮影所作

映畫「黄金道中」

脚本　龜村正治
演出　押本七之輔
撮影　廣田晴己

——配役——

女旅鴉人ワカナ
玉松城の若殿一郎君……玉松ワカナ
同家老淵井伴左衛門……伴　淳三郎
女旅鴉人お光(實は雪姫)……森　光子
松川又右衛門……光岡龍三郎
玉松城の使者……阪東太郎

山村—それでは原作者の龜村さんから御感想を。

龜村—あの映畫を作るにあたつて、娯樂映畫で而も國策に副つたものといふことを一番に考へて居りました。今まで私は漫才映畫を數種しか觀てゐませんが、——私の觀たところでは、笑ひつばなしの嫌ひがありました。笑ひつばなし、抛りつばなしといつたやうなものでなく、その笑ひの中に、ちくりと針の指すやうな川柳的なものが自分の思つてゐる方法の一端でして、皆樣も御覽下さいまして直ぐお判りになられたやうに、隣邦保善を幾分なりと盛り込んだつもりです。今後漫才映畫を作るに際し皆樣御先輩の川柳の持味を漫才映畫にも出してゆきたいと願つてゐます。簡單ですがこれ位で……。

路郎—私はこの前の「金比羅船」を觀て、少し言はして貰つたのですが、(此時、ワカナ、一郎出席、路郎の前面に着席)前と違つた——勿論良い意味で違つた無軌道的朗らかさで而も明るい感じのする——寫眞のやうに思ひました。しかし、將來の映畫作製上、何か喋れと言はれれば、當人達が居らないと却つて具合が惡いが、斯うしてワカナさんや一郎さん本人が居られるとなれや。(笑聲)

路郎—先づ僕の氣付いたのは言葉の點ですがね。今度の映畫でワカナさんが下品な言葉で終始してゐるのが氣になる。これは舞台ではそれ程、耳障りにならないが映畫ではかなりビンとくる。同じきつい言葉を云うにしても、もう少し言ひ方を考へたらどうかと思ひます。

ワカナ—そうですね——。(思ひ入った知く)

某人—味と灰汁の相違ですね

一郎—一カット、一カットでは惡い言葉でも判らへん。が舞台だつたら、よく判つて、このところで、ぐつと締めるとか、或ひはドンと落すとか出來るんです。

ワカナ—そこを監督さんが氣付いたのですね。それで握り飯たべるところを入れたのです。

某人—この前の「金比羅船」よりは動きが多い。

水客—科白のやりとりは原作者のまゝですか?

ワカナ—原作者と監督さんとわたしたちのと——。

一郎—この映畫の一番良いところは、別に働き乍ら撮影したことです。

山村—さうです。以前の映畫の「金比羅船」は、映畫だけ專門にかゝつて貰つたのが、今度は南座の舞台でやつてゐる忙しい間に、午前中にやりました。それも二日や三日やつたら何ですが、南座が終つてからも、大阪から暫く通つて戴きました。

路郎—そんなの、あまり例のない事でせうね。

山村—それは隨分、大變でした。

一郎—朝、五時ですからね。

ワカナ—郵便局より早イ——(笑聲)

かほる—アンタ、(一郎に)えらい力でんな。手洗鉢がうんと動きましたね。(笑聲)

一郎—樹が宙で動くしね。あの中で一番エラい思ひをしたのは井戸の中でね。跪くまつて這入る位の井戸を深い井戸のやうに見せかけんなりまへんやろ。上つたり、下つたりして、……

路郎—かほる君が、いつか觀た映畫で始め出たのとその次に出たのと手拭の模樣が變つてゐたといふ事であつたが、川柳家はなか〳〵細いところを觀ますよ。

ワカナ—よくあるんですのよ

某人—「金比羅船」で始め月代が剃れてゐて、次のカットではボーボーと月代が延びてゐたり……。

一郎—あの中で、石に躓つまづいたところで、ホープを落しましたので、もう一遍遣り直してそのホープを踏んで、わたつてますわ。

ワカナ—科白がちつとも覺えられないの。

一郎—だから科白の長いところは柱に書いて貰つたり、黑板に書いて貰つたりして、あらぬ方に視線が走つてゐるといふやうなところも氣付かれてますやろう。「金比羅船」の所の最後の船の中の「子曰く……」の長いところも、黑板に書いて貰ひました。

孤逢—あの、しまひの金を賣りませうのところで一寸强調し過ぎましたネ。

某人—ニュース映畫みたいだ。

田舍に住めば

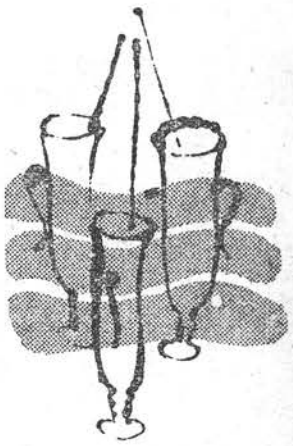
姫田夕鐘

麥と桑で敷詰めた靑疊の一角に三間餘もある高さの石垣に宏大な家敷を構へ一城の主よろしく之が自他共に許す成金さん。なんでも朝鮮の金脈を堀當て一躍本當の成金さんとなり故郷で餘生を送つてゐる。時節柄耳寄な話ではあるがもう一昔前の話になつてゐる。土地の人々は成金さんの敬稱で呼んでゐるが御本人さんもそれでシヤー〳〵として居られるのでいと朗かな情景で田舍なればこそ、と思はせる。もし都會人なればとつくに成金はカムフラージュするものと思へばほゝ笑ましくなる。聞くところに寄ると年に一回は幾何かの金を投出して村の貧民を

スピルカ

カルピスへどちらが姉か妹か　路郎
初戀の味か　アハハと父も飲み　同
別莊のテニスカルピス運ばれる　同
カルピスに靑葉の見える應接間　葭乃
カルピスも代用品の安喫茶　同
あんのじようカルピスにする二人連れ　同
カルピスを持つて新居を尋ね當て　水客
ワンピース・カルピスを飲む型に出來　同
カルピスの見舞を先に屆けて來　同
レコードハボレロ・カルピス飲んでゐる　潮花
カルピスへ課長と來てる女秘書　同
七階で飲むカルピスへ夏の風　同
開幕のベルへカルピス殘して來　紫香
寫眞機を提げてカルピスのみに來る　同
カルピスを眞直ぐに吸ふ令夫人　同

——編輯の夜に——



豆秋—一番優れてゐるとこは襟のうしろを掻いたところですね。

山村—文部省の推薦一般映畫に、今度これが漸く通りました文部省としては、あまり色つぼいとか、小供つぽいとか、殘忍なのは、いかんといふことで、これも實は案じて居つたのですが、ところが見方を代へれば國策映畫であり、漫才映畫であるといふ自信もありました。この三、四日はハラ〳〵した次第です。

路郎—松竹などの映畫に寧ろ禁止していいのがある。——この前、アコージョンをもつと生かしたらどうかと言つて置いたが、今度は大分に使ひましたね

鈴木—檢閲でイカンといふやうなことがあつては、と考へたので、科白に最初、南蠻渡來の云々を入れて斷つて置いたんです。

豆秋—お宮さんのところ、愉快ですね。ボン〳〵叩いてまわるのは……。

一郎—始め、豚を連れて歩くところを撮ると言つてたんですが

孤逢……—成程、それで判りますな。

鈴木—あれで、ワカナ節がもつと澤山入れて欲しかつた。

一笑—道中を、もつと長く映して欲しかつた。

豆秋—作句者がユーモアがあると思つてゐて、讀む人がちつかつたのです。

山村—何か川柳と一脈通じてゐるところがあれば聽かして貰へませんでせうか。

豆秋—作句者がユーモアがあると思つてゐて、讀む人がちつとも無かつたら寂しい思ひをしますね。卷ずしをお喰べと言つて自分が先にほうばるところなどはいゝですね。

アキラ—家老が客席の方を向いて「やかましいッ」と言つたのは舞台では出來ないところですね。

一郎—あの邊の監督さんは良かつたですねえ。

ワカナ—あれは本當によかつたのですネ。

路郎—漫才に對して註文がありますが、——くすぐつて笑はすものでなく、本人はいたつて眞面目でゐて、そこに矛盾があつて自然に笑ふといふ所を狙つて欲しいと思ひます。

鵜村—道中のところは、それを狙つたんです。

山村—ではこれ位で打切りませう。いろ〳〵有難うございました。

(漫畫・竹中聞)

鵜村—道中の場で、木賃宿のところがあつたが、時間の都合で、拔いてしまひましたが、本當はもつと道中で疲勞するところを出せばよかつたんですね。

その映畫を觀るワカナ・一郎

「黄金道中」を觀る

○ 麻生路郎
殿様のあはれは低腦ぬとも知らず
武士たるものが命令で笑ひこけ

○ 麻生葭乃
よい星の下に生れて無策で居
金よりも尊い水と殿思ひ

○ 水谷鮎美
焦燥の殿へ皆ンなもあはてたり
鶏の聲旅藝人は歩いてゐ

○ 岡田某人
生きてゆく姿鳥追ひ裾短か
亂闘になか〳〵斬られそもない主役

○ 宮岡白峯
輕く取られた殿の座布團

行列へワカナとしての口をきき

○ 正本水容
悪口になればワカナの顔になり
刺客團金魚酒など呑んで待ち

○ 黒川紫香
身替りの豚は何んにも知らぬ顔
悲しさと別に首筋かゆくなり

○ 高橋かほる
馬鹿と云ふ言葉に家老味をつけ

○ 須崎豆秋
アコーデオン若殿様はいゝきげん

○ 戸田孤逢
空腹をいたはる方が先きに喰べ

○ 丸尾潮花
二文のすしに師弟のあたたか味

○ 夷一笑
藝人を一人殘して舟が出る

○ 岩崎水虹
嘘をつく知慧を女が持ち合せ

○ 平川久枝
はつきりと痰呵をきれば宿が無く

○ 竹中アキラ
殿様も拔け家老も拔けてゐておかし

○ 橋本美奈子
弟子にした以上はといふむごい事

○ 北川春巣
金山を掘る鶴嘴がよく揃ひ

川柳家よ何處に還るか

蛭子省二

秋農屋翁から「公私月報」(外骨翁編)を、自第一號迄第百六號頂戴した。

「公私月報」第九十三號(昭和十三年六月)に、「加賀の百萬石といふ雜誌」の見出しで、外骨翁一流の趣味記事がある。川柳關係のところのみを寫す。

『此百萬石といふ語が氣になるのである。封建時代には大藩として威張れたのであらうが維新後平民育ちの我々から云へば、百萬石の大名とは、苛斂誅求で農民を苦しめた最も大なる悪魔であつたとしか思へないのである。今から三十年ほど前、加賀金澤の人安川久流美といふ者が「百萬石」といふ新川柳の雜誌を發行して予へ郵送して來た。其時「キミは封建思想で百萬石といふ語を誇りとするやうだが、予はソンナ舊思想の人が作る句を見たくない。又百萬石といふ標題だけを見ても胸くそがわるい今後の郵送はお斷りです」と峻烈に通告した事があつた』

と。今、これを安川君が讀まれたら、微笑しつゝ三十年は若返り得られよう。百萬石も笹の露ではないか。——(今日は百萬人といふ言葉が流行りかけて居る)——觀方によつては封建思想語ともとれはするが、さう執着をもたず、温古知新は詩徒の本領なのだ。「川柳百萬石」誌時代が基礎期であつたのだから、モ一度「百萬石」なる雜誌を再建してみては如何。

川柳を寶暦明和の昔に還せなどといふ主唱には、往々封建思想禮讃が交つて居る。古川柳及江戸趣味研究は逆戻りする爲ではない。皇紀二千六百年を慶祝する意義は、何んであるのか中途半端なところに還るをやめよ。

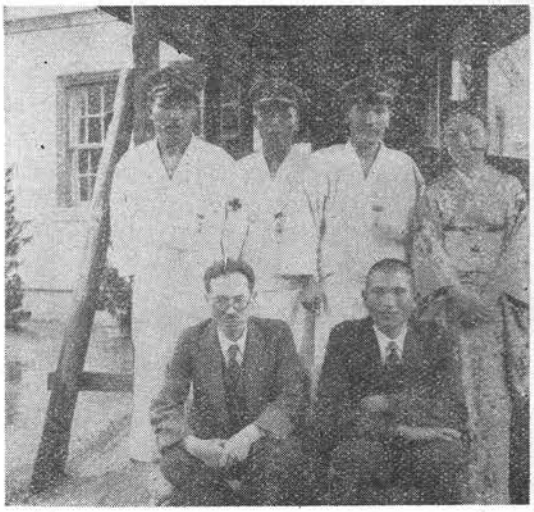
救濟してゐる美談を持合してゐる。此の成金さんいと、うどんが御好物とあつて一寸喰ても七八杯腰を据へると十二三杯は、へつちやら、とはどこまでも田舎式の成金さん。

柳界展望

全國川柳界のこと各地川柳人の一擧手一投足を此處望觀ですぐわかる樣にしたい皆樣の御通信を歡迎する（編）

催

▼川柳雜誌社本社句會は五月四日午後六時半、御律八幡宮に於て開催▼五月五日午後一時松坂倶樂部麻生路郎川柳講座▼五月八日午後四時新興キネマ試寫室に於て川柳雜誌社主催の映畫觀賞會を開催し、午後六時から戎橋三笠屋四階に於てワカナ一郎と其映畫を語る「座談と作句の夕」を開いた。（別項記事參照）▼五月十三日夜、尼崎住友金屬工業鋼管製造所の親友會句會▲五月十九日午前七時より廿日午後一時へかけて松坂倶樂部麻生路郎川柳講座は出石・城崎へ吟行、▼五月廿日午後四時、鐵道病院支部一周年句會開催▼五月二十三日有恒川柳會▼五月廿七日午後四時、阪大川柳會の醫學使節として訪獨の布施筑川博士北市民病院長に榮轉の石崎洗塵博士の祝賀句會以上いづれも路郎出席



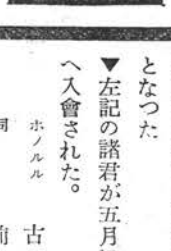
雨の陸軍病院慰問

（後列向つて左より）酒井美知夫君●戰友岡重義軍曹●戰友上岸友吉君●橋本美奈子さん（前列左より）麻生路郎幹主●宮岡白峯君

（大津にて橋本繰雨撮影）

消息

▼清水白柳子君（不朽洞會員）は養老の瀧に遊び、一葉を本社へ送らる。曰く「養老へ親不孝者顏を洗ひに來ました。瀧しぶきあゝ酒不足なる身にこたへ」と▼小川靜觀堂君（海爾拉）より「勤務は頗る多忙、生活は之に反して大平凡目下雪解の大洪水です、ノモハン一周年を迎へました」との通信があつた。▼居谷一柳君（堺）は一時旺んに作句されてゐたが堺での句會が永らく休會の形であつたので勢ひ同君の作句熱も暫く下火となつてゐた。此度堺支部が新設されたから今に君の名吟は續々とほとばしり出る事であらうと大いに囑目されてゐる。▼寺井鋭々君（不朽洞會員）は五月中旬日向高千穗鄕、鵜戸神宮、宮崎神宮、霧島神宮等の舊跡を巡歷され鹿兒島市より薩摩半島南端の指宿溫泉へ足を延ばして歸阪された。▼田中風葉君（不朽洞會員）は軍事訓練のため試寫會へも編輯會へも顏出しをされなかつた。▼森東魚君（新居濱）は五月二十日二十一日と本社へ再度來訪されたが生憎主幹が不在であつたので一片の置手紙で歸濱された▼杉原大研子君（不朽洞會員）は十五日夜、路郎、白柳子、伸仙小松園、滿潮君等を招いて稻荷祭をされた。▼尾崎綠柳君は四年振りで歸國され鄕土禮讚の便りをよこされた。▼石崎柳石君（廣島）は去る三日久米雄・秋史・風來子・天國の諸君と廣鐵局食堂で快談。▼西尾栞君（不朽洞會員）は五月四日信濃路の旅より「溫泉やアシカのやうにしてもみつ」の句にそへてリンゴの白い花が珍らしいといふ便りがあつた。▼原史風君（不朽洞會員）は名譽職を一手にひき受けてゐられるので句會は不參勝であつたが四月廿八日の不朽洞總會に出席綠雨・かほるの兩君等と舊交をあたゝめられた。



弔

▼大島石艸君（大阪府）は昭和十四年十一月十四日永眠された御遺族からの御通知で拜承した次第、哀悼の念に絕えず。俗名成元、法名釋淨雄。

轉居

▼松本雪舟君は吳市神田町八丁目二ノ五近藤濟司樣方へ▼森直一君は東京市赤阪區田町一ノ一一五山川いし樣方へ▼大照演算子君は京都市下京區唐橋羅城門町五へ▼掛飛吉宣君は東京市麴町區五番町二ノ九平林丸夫樣方へ▼井口蛙郎君は大阪市住吉區阪南町東一丁目四一へ▼大森風來子君は廣島市國泰寺町一三六保田樣方へ

★社告

▼支部の異動

○今里支部は、幹事市塲沒食子君歸還と共に幹事を好崎申仙君に讓り、支部區域擴大のため、支部名義を城南支部と改稱。

○堺支部新設。中原銃人君が同支部幹事擔任。

○葉櫻支部では多田一波君が多忙のため幹事を辭任されたので梅田秀溪君がその後を襲ふことゝなつた

▼左記の諸君が五月に不朽洞會へ入會された。

ホノルル　古川風竹君
同　前山北海君
同　古川魔花麗君
同　岩崎山石君

▼五月十二日、第一編輯日、午後より春巢、水客、潮花、紫香の諸君が來洞された。春巢君は廣島の珍客石原伯峯君同伴のため夕刻辭去。

懸賞

誌友倍加運動

當選番號發表

本誌が愈に懸賞誌友倍加運動を劃し趣味陣營の擴大を發表いたしましたところ幸ひ柳友諸賢の御支援を得て多數の應募者がありましたので五月廿一日の吉日を卜し本社に於て嚴正抽籤を行ひ左記當選番號を發表する運びとなりました。

一等　第〇〇〇〇貳貳番　賞品　函入川柳掛軸（麻生路郎揮毫）

二等　第〇〇七參貳番　第〇〇七參八番　賞品　川柳横額（麻生路郎揮毫）

三等　第〇〇〇〇六番　第〇〇〇〇貳四番　第〇〇〇〇四七番　第〇〇〇〇五五番　第〇〇〇〇五六番　第〇〇〇〇五七番　第〇〇〇〇六四番　第〇〇〇〇六六番　第〇〇〇〇七貳番　第〇〇〇〇八〇番　第〇〇〇〇九八番　第〇〇〇〇壹〇壹番　第〇〇〇〇壹五番　第〇〇〇〇參貳四番　第〇〇〇〇貳七〇番　第〇〇〇〇參貳〇番　第〇〇〇〇四七六番　第〇〇〇〇參參參番　第〇〇〇〇四〇參番　第〇〇〇〇五〇五番　第〇〇〇〇五壹貳番　第〇〇〇〇四七九番　第〇〇〇〇六八一番　第〇〇〇〇六八六番　第〇〇〇〇七參參番　第〇〇〇〇八貳壹番　第〇〇〇〇八貳五番　第〇〇〇〇九壹九番

四等　以上の番號に洩れた方々全部　賞品　川柳短冊（麻生路郎揮毫）

（當籤番號通知不要）

御當選者に告ぐ　左記番號中に當選された方は來る六月末日迄に抽籤番號票を御郵送願ひます。到着順により賞品を發送致します。但し一等及び二等の賞品發送は表裝に日程を要しますので豫めお含み置き願ひます七月十五日迄に御通知なき塲合は當選を棄權されしものと見做し整理上賞品の發送をいたしません。當選者の氏名發表は本誌八月號にいたします。

川柳雜誌社

水虫新治療劑
セイロポン
ミツムシ
ハイシ
ンラ
タキク
ケンモサシ

大阪市東區平野町一
發賣元　白井松新藥部
振替大阪六六六八四番

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規

▼用紙は原稿用紙又は投句箋の事
▼文字を正確明瞭に記載のこと
▼開催月日及場所記入のこと
▼締切は毎月廿五日とす
▼投稿先は本社宛

路郎・豆秋整理

本社五月例會（大阪）

五月四日　於　御津八幡宮

出席者（順不同）

路郎・葭乃・リリ・きみゑ・白峯・綠雨・豆秋・細泉・潮花・龍成・湖秋・久人・翠葉・亞鈍・笑門・南風・競舟・かほる・水虹・久枝・水客・紫香・染史・孤蓬・夜王・指洋・巨人・滿潮・秀溪・翠芳・双虎・紅多呂・鮎美・安靜・萬的・ライト・一笑・白柳子・松太樓

目出度く歸還された白峯君が久し振りの句會で柳話、一同感激の拍手をもつて終つた。

席題「德　用」　互　選

德用品いさゝか醉つた客が立ち　滿潮
德用もあと二、三本となりにけり　翠陽
德用品おんなじ柄の人と合ひ　水客
德用のマッチ二本をつけそこね　萬的
德用のマッチを出した花の茶屋　水虹
品質をけなし德用買うて去に　双虎
お德用ですとマネキンおしつける　潮花
德用のマッチ里からもらうて來　一笑
德用のマッチですつた喫茶店　湖秋

席題「自轉車」　豆秋選

自轉車を下りて見なほすいゝ櫻　滿潮
うどん屋の自轉車祭りの宵をぬけ　紅多呂
自轉車の早さをほめて駄賃出し　ライト
自轉車を降りて海岸ほめて行き　染史
口笛で自轉車五月の風を切り　夜王
チト遲くなつて自轉車借りて去に　白柳子
自轉車の後から小さい犬が吼へ　巨人
豆腐一丁自轉車番頭にものられ　綠雨
日曜の自轉車番頭にものられ　孤蓬
（秀）乘りすてゝある自轉車に陽がたかし　鮎美

席題「同　情」　白峯選

新聞へ載つて同情金が來る　紅多呂
同情と罰とは別な刑事室　孤蓬
あたたかい心僞名でうけてゐる　綠雨
巡査ふと同情をする顏になり　紫香
同情をされて醉へない酒を呑む　双虎
（佳）ぶろれたりやの同情をかふ横顏よ　鮎美
同情週間僕はキザ〳〵一つだけ　巨人
同情を寄せる男の手を拂ひ　亞鈍
同情はするがと叔父のつめたい目　一笑
にんげんとして逃げおくれたる子を抱き　鮎美
（人）同情の肩へ五月の陽が當り　かほる
（地）校庭の隅で一緒に泣いたとさ　亞鈍
（天）冷えた茶となり同情の眼がまとも　鮎美
（軸）同情よ感謝よ君の松葉杖　白峯

席題「算　盤」　夜王選

そろばんの先生飯を煮いてゐる　豆秋
末席にゐるそろばんが合うてゐる　鮎美
算盤の一桁違ふ闇相場　指洋
教室は算盤終つた晉になり　久人
二人してする算盤へ時報鳴る　双虎
そろばんを抱へ夜店をかけぬける　水客
まける氣の算盤いちど彈いてみ　紅多呂
算盤が上手で今日も殘らされ　巨人
算盤を止めて子供に蒲團着せ　染史
課長から呼ばれ算盤持つたまゝ　龍成
算盤がきらひ油繪描いてゐる　紫香
停年を算盤玉ではじかれる　潮花
その話なら算盤はぬきにしよ　滿潮
（秀）算盤の音五時間の子が歸り　白柳子

兼題「デパート」　路郎選

屋上へ買はない顏が揃ふなり　美知夫
デパートで課長夫人と又出合ひ　紫香
岩波の缺本を買ふ百貨店　白柳子
デパートが建つて日當り惡くなり　翠陽
デパートで逢つた級友番に結ひ　久枝
園藝品小鳥地階は春の風　一笑
デパートの人出大阪だなと思ひ　翠陽
デパートを漁りつかれてソーダ水　双虎
デパートで都會の匂ひかいで去に　久枝
デパートは夫の袖を引くところ　紅多呂
まつすぐに八階へ行く子澤山　久枝
デパートの空で爆音ビラを撒き　亞鈍
デパートの隅は結婚相談所　水虹
呉服部で夫は欠伸かみしめる　紫香
地下鐵で又大丸へ舞ひ戻り　史風
そば食べただけでデパート用が濟み　美知夫
デパートへ突き當つて來る春の風　紅多呂
閉店のベルへせはしう掃いて來る　孤蓬
づるい母ちゃんオモチャ部は素通りし　龍成
デパートへお金のかゝる人を連れ　潮花
終列車で發つ人と來る百貨店　滿潮
デパートの試食を子にも貰ろて　巨人
父と來た日のデパートのえびフライ　滿潮
デパートで抑え切れなくなる虛榮　松太樓
乘り換勞が散るデパートの中二階　かほる
デパート中呼びかけられたお連れ樣　水虹
デパートへ男約束はたしに來　潮花
某デパート牛三頭を喰と云ふ　翠陽
デパートで賣る娘買娘の眼が出合ひ　双虎
デパートで連れて來た子を忘れかけ　豆秋
デパート迄來て月曜と氣づひたり　一笑
デパートを出てから浪費悔ひてゐる　龍成
陳列のかげにかくれた宣傳部　葭乃
（人）デパートで食べるからと家を出る　湖秋
十合大丸帶一本にくたびれる　葭乃
萬引の自宅芦屋とも云へず　滿潮
（地）デパートは夫の主義にさからはず　史風
デパートで姑さんを見うしなひ　潮花
（天）數學のうとい女房と百貨店　滿潮
（軸）デパートで夫の勤務先へ掛け　路郎
あやまるにデパート主任呼んで來る　同

雜川　**今治支部句會**（今治）

四月廿六日　長文野庫報

慰問品ビン穴のあるブロマイド　向上庵
ブロマイド女としての好き嫌ひ　心府
美人にて名前は知らず飾られる　地下水
きゝ分けの無い子と玩具屋も思ひ　鬼外
子供等が歸れば後へ月が出る　溫石子
亡き父を引ッ張り出して子を叱り　文庫

雜川　**鶴町支部句會**（大阪）

四月十八日　松太樓養母キヨ殿追悼會　岩橋双虎報

慰問品ビン穴のあるブロマイド　向上庵
ブロマイド女としての好き嫌ひ　心府
美人にて名前は知らず飾られる　地下水
きゝ分けの無い子と玩具屋も思ひ　鬼外
子供等が歸れば後へ月が出る　溫石子
亡き父を引ッ張り出して子を叱り　文庫

雜川　**廣島支部句會**（廣島）

三月十五日　大森風來子報

通帳が別々にある共稼ぎ　蓮生
あんまりに強くも言へぬ共稼ぎ　狂兒
俄雨知らない家でお茶を飲み　天國
測候所恨んで濡れるハイキング　演算子
雨宿り娘の場所がせまくなり　紫浪
子がみんなあばれる雨の日曜日　山雨樓
雨となり嵐風雨となつた協議會　江波
ぼんやりとしてゐるけれど損はず　風來子
追ひ付いてぼんやりしてゐる肩を打ち　秋史
立志傳ぼんやりしてたのは書かず　八翠坊
迷ひ子に坊は何處かと無理な問ひ　三昧

迷ひ子のすゝり泣くまゝ屈けられ　江波
迷ひ子の居るボックスへ炭を増し　風來子
迷ひ子の母は氣抽く見盡され　秋史
自由畫の煙氣儘な方へ向き　俗菩薩
故郷の朝の煙の懷しさ　山雨樓
軍需景氣の煙に卷かれる　久米雄
樂屋裏眞顏になつたアチヤコを見　三木
怒つてる事を眞顏になつて見せ　須彌浩
工場を眞顏にさせた血のベルト　幽香里
兩親の喧嘩へ子供おびえきり　山雨樓

四月二十六日

懷に未だ旅費がある途中下車　蓮生
キユーピーの横顏あまりにあつけなし　紫浪
平然とゐる横顏が侮れず　須彌浩
横顏へくい入るようにみとれてゐ　狂兒
應募する工場の煙を見てゐたり　風來子
上役に何時かなる氣のお茶をくみ　天國
上役の奥樣らしく取りすまし　秋史
大氣焰やがて藥を取り出だし　寧男
晩酌の氣焰女房聞き流し　九坡
怪氣焰衝立がありすきやきや　心太樓
曉にほと〳〵叩く我が家なり　三昧
曉の空氣へ旅の驛を出る　幽香里
曉を憂きものにして丁稚起き　俗菩薩
曉の空へ溶け込む壯行歌　伯峯
曉のこゝ滿洲といふところ　露斗
青雲の眉曉へ靴を穿く　久米雄

四月八日

飛び入へみんな搦ふて道をあけ　不汚
飛び入りが耳打ちされたとは知らず　風來子
飛び入りへうるさくなつた野次の聲　天國
飛び入りが一等賞を持つて去に　伯峯
飛び入りに賞品のいる事が出來　三昧
市場まで行く前掛の紐を締め　俗菩薩
弱點へ默つて酒をついでやり　秋史
片親へ又泣いて來る子の弱み　幽香里
出張で來た廣島の川ばかり　久米雄

川雜　**竹原支部句會**（廣島縣）　西野みづほ報

見込まれた養子が使ひ果したり　愛鳩
三人になつて養子の角がとれ　芳郎
献金へ子は子で別に持つて行き　みづほ
昔の俺ならと思ふ日のあり　芳泉

川雜　**下關支部句會**（下關）　東方司牛球報

迷信をまことの神の水ときめ　苦笑
只一人置くにはおしい丙午　米三
迷信と言つて仕舞へぬ千人縫ひ　牛球
待呆けやけに石など蹴つて見る　市多樓
待呆けらしい煙草を喫つた跡　九呂平
青春は櫻の花の樣に去り　はつみ
春の風吹いて湖水に花が咲き　賢次
下戸一人汽車辨で來る花の山　米三
知らぬ間にすみに置けない年となり　潮流
制服を脱いで白粉手に延べる　逸千坊
長屋にも年ごろがゐて陽氣なり　草路

川柳を募る

★化粧新聞社柳壇

課題「鏡」「香り」六月十日

用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）

選者廉生路郎氏

宛先　堺市出島町三五一番地　不朽洞

親の眼が絶えず見護るまなむすめ　柳月

川雜　**葉櫻支部句會**（大阪）　梅田秀溪報

四月二十八日

夜櫻の明りをさけてゐる二人　細泉
夜櫻を見てるベンチに二人切り　翠花
水際の戀へ櫻の花が散り　潮花
見舞菓子看護婦さんに分けてやり　競舟
御婦人の客へ看護婦座をはずし　湖秋
人の氣も知らず看護婦きつく卷き　笑門
看護婦の肩で歩けるようになり　一水
來客へかけた灰皿そつと出し　秀溪
灰皿へ君の個性のまゝ殘し　一波

染史君を迎へて

四月三十日

久し振りオールを持つた中の島　風葉
久し振り歩いて中の島の風　染史
久し振り昔と同じ辯があり　水客
久し振り五つの肩の揃ふ宵　潮花
久し振り會へば子供を抱いてゐる　紫香

川雜　**四ツ橋支部句會**（大阪）　中内翠芳報

四月十二日

夕刊も事件があれば良く賣れる　秀甫
一錢を闇に探してる夕刊屋　綠雨
迷子を中に狹んだ人の垣　白龍
迷子は監督さんに手を引かれ　失名
迷子を探す母親氣が狂ふ　朗舟
デパートで夢中になつて子を忘れ　翠芳
迷子はアツチから來たと手こずらせ　美奈子
迷子を探すに物見フイになり　德磨
迷子にさせて母親叱られる　防風
迷子の放送空にアドバルン　夢想
迷子を躍起で探せば蜻蛉とり　山人
幾度も迷子の母は禮をのべ　靜峯

阪大川柳句會（大阪）　丸島利生報

出戻りは花の散るのを見つゝ編み　栞
出戻りは自分が悪いとは云はず　柳秀
出戻りは氣立てのことを先に聞き　同
出戻りの氣持が母に分り過ぎ　春巢
怒つても笑うても出戻りヒスにされ　栞
出戻りへ母アさんになる口があり　柳秀
出戻りの夢に見る子は床に臥し　同
出戻りが留守番さすに役になり　同
出戻りがとつぎ嫂ほッとする　同
出戻りの姉肩が凝り腰がつり　同
どう云ほうとも出戻りは愚痴にされ　同
親の自慢が出戻りにして仕舞ひ　方正
花吹雪さへ出戻りの眼に淋し　水虹
洋裁で立つ氣出戻りが強し　春巢
出戻りがゐて慎重な口をきゝ　水虹
花見酒空巢の眼には馬鹿に見へ　同
標札の巡査を空巢見て通り　春巢
新米の空巢は靴をおいて逃げ　同
要慎をしろと空巢の置手紙　柳秀
悪びれず錠を壞してゐる空巢　方正
その留守を空巢隣りに確かめる　柳秀
花の留守うつかり犬を頼りすぎ　水虹
だしぬけに電話空巢を驚ろかせ　春巢
空巢ふと衣桁の襦絆嗅いでみる　栞
空巢ふと振りむけば國旗はためく　同
國策の線に還暦隱居せず　方正
頑固さは還暦と云ふ歳でなし　同
還暦はまだ〳〵と云ふ慾をもち　路生
還暦はまだ〳〵と云ふ慾をもち　同
孫を抱けば還暦の顏になり　同
還暦にしては元氣に豬口をあけ　同
ドッコイショと還暦腰をかけ　山彦
何とでも言へ人生六十年はすぎ　水虹
理想なほ高く還暦には觸れず　同
保險金取る還暦の顏のつや　同
還暦が冷水摩擦まだ止めず　同
屈託もなく還暦の欠伸する　同
還暦の血壓他人がきいてくれ　同
還暦のそれから涙もろくなり　栞
還暦のそれからおみき强くなり　同
還暦へ祖父曾祖父の年もでる　同
還暦は何處かに赤い物をつけ　柳秀
どうしても本家と見へぬ髮のつや　同
還暦は案外若い聲を出し　同
年寄りにされて還暦肚を立て　同
還暦を祝ふ布團へかさひくし　栞
今年から扶養の父と書き出され　山彦
何の祝やと還暦とりあはず　方正
還暦で名譽教授は他人のこと　同
謠も知らず還暦元氣なり　路生
還暦が少々ぼけて罪がなし　路郎
還暦もいゝが家賃をまだ拂ひ　同
還暦に金で貰つた初段也　同
手を握るくせを還暦いやがられ　同

松坂倶樂部句會（大阪）　石井白面人報

四月二十一日

外米で兒が下痢しますと立話　普天
外米がどうのこうのと肥えてゐる　同
大師講外米のまゝ供へてる　同
二千六百年あゝ外米を食べ慣れる　白面人
田舍はよいなと外米に懲りてゐる　同
外米に病む弟が羨まし　美根子
外米に十一貫は恐れ入り　孤篷
外米の他は不足のないくらし　同
戰は勝たざる可らず外米の味　生々庵
さり乍らさり乍ら外米の舌ざわり　同
外米に銃後の護りためされる　同
ポチ袋一圓札の用意する　白面人
ポチ袋隱すが如く握らせる　普天
軍人のチップはじかにおいてゆき　孤篷

ポチ袋だまつてはさむ名古屋帶　同　美根子
ポチ袋の重さが世辭をいはせてる　同　生々庵
もう二度と來ぬポチ袋しまつとき　同
ポチ袋中味は勘で禮を云ひ　同
ポチ袋頂く時の別な顏　同
ポチ袋開いてチヨンと舌を打ち　同
ポチ袋輕かつた下足の並べ樣　同
ポチ袋もう一圓入れよか止めとこか　同
ポチ袋こゝで男を見せておき　同　美根子
塀には固いベッドが待つてゐる　普天
二階の戸締めたまんまの獨り者　同　孤蓬
退け時の君も塀に急ぐのか　美根子
塀から朝の電車へ吸ひこまれ　白面人
十八九花嫁學の忙しさ　同
赤いものばかりも似合ふ十八九　孤蓬
十八九兄のお古で我慢せず　同
ニキビ藥眼について來た十八九　孤蓬
哲學ものぞいてみたい十八九　同
戀文にあらねど書かゝん十八九　同
徹夜してまだ云ひ足らぬ十八九　同
十八九俺と雲雀と蒼空と　普天
十八九大陸の夢、海の夢　同
十八九蒲團の樣な柄を着る　生々庵

五月五日

煙草の火貸して人柄見て終ひ　美根子
家庭爭議火元は女中であつたのさ　同
火の中もあへて辭せない僕なのだ　白面人
煙草の火安い頭をさげさゝれ　普天
待つと云ふ客に火鉢を運んどき　孤蓬
燃えうつる軸木何をか無常觀　白面人
市川羽左衛門などとふざけた旅廻り　同
サーカスの幟に書いた新歸朝　美根子
鯉幟こゝにも日本男子あり　同
インフレを泳いでるよな鯉幟　孤蓬
怪しくもスフの幟の尾の行方　同
お隣りの鯉にかくれたサンルーム　普天
門閥を誇る幟の紋所　同
落ちぶれた廢つた幟日蔽にし　同
藤棚にアイスクリームの幟が出　生々庵
若人よ征け五月晴れ鯉幟　同
もう敵を呑んだ出征の幟立て　孤蓬
銀行は金より帳簿大事がり　同
取引は一六銀行といふ奴さ　美根子
世辭のよい銀行員の出世ぶり　同　白面人
銀行の扉を借りる日重く押し　同
定期預金書替へる日の未亡人　普天
銀行で綜合課稅聞く惱み　同
頭取に面會守衛はヂロリ見る　孤蓬
ネクタイも身體も細い銀行家　同
丁寧な言葉で過振りせめてくる　同
だぶついた方へ貸付頼みに來　美根子
銀行家フト北濱にあこがれる　普天
剃刀に新妻の手の柔かさ　生々庵
剃刀で脅され女將騷がない　同
思ひ出は剃刀見つめた頃もあり　同
朝々の剃刀にちらと倦怠期　孤蓬
剃刀のついでだお前も剃つてやら　同
剃刀をしまつたとこへ飲み仲間　同
いゝ事があるのか髭を剃つてくる　同
ゆく春を剃刀の影みつめたり　同

有恒川柳會（大阪）

吉報の次は祝と如才なし　波夢造
吉報のビラは時間を入れる丈　同
よいしらせ床屋の父に言ひに來る　同
吉報でなくて報らせはハガキなり　五遊
吉報はまだか〳〵と親且那　同
吉報があつたかニヤリ〳〵する　同
吉報があつて島田に結ひ初める　行三
職地からの手柄便りに母は泣き　同
昇給を母に知らせて一ぷくし　同
吉報の電話奥までもう聞こえ　鋭々
吉報の使盃持たされる　同
吉報をゆつたりと聞く大火鉢　同
吉報へ庭の櫻も眞つ盛り　同
あいつから來た吉報で落付かず　至藝瑠
吉報吉報他人に知れる顏で讀み　同
あてにせぬ吉報更にあきらめず　同
又茶碗ですかと樂燒受取られ　波夢造
奥樣が親ら洗ふ茶碗なり　同
啄木を氣取り茶碗をじつと見る　同
雛祭り茶碗が口にはいりそう　五遊
新世帶對の茶碗で膳につき　同
子澤山今朝も茶碗が一つ破れ　行三
お揃ひの茶碗で食べる給與食　同
子を持たず淋しく夫婦茶碗買ひ　同　鋭々
一萬圓の茶碗同じお茶の味　同　至藝瑠
茶碗割つた事が叱言の第一歩　行三
國寶の樣な茶碗で乞食食ひ　同
成金は第一番に櫻植え　孤蓬
小公園埃まみれの櫻咲き　同
平熱が續き櫻のこともきゝ　路郎
吉田屋へ落ちつくことにする櫻　同
ようもまあ汽車辨ばかり櫻咲く　同
水臭い酒とも知らず櫻咲き　同

三月二十八日

「コテイです」などとチヨッピリ振つて臭ふ　波夢造
姉樣の香水盜むニキビが出　同
香水で彼女と判る仲となり　五遊
嫁ぐ娘の香水使ひ荒いこと　行三
麗人の素性が知れる安香水　同
素人のかなしさ香水釣合はず　同
香水を案外ケチつく御寮人　同
香水のハンカチ眼鏡拭いてくれ　鋭々
香水の渦卷くドレス疲れたり　同
しやなり〳〵香水の香を漂はせ　同　水棹
香水を含んだ手紙時は春　同
安香水芬々として慰安會　同
エゲツナイ香水口紅濃過ぎる　同
形見わけジヤスミンほのかに香る　波夢造
踏切は物憂さそうに旗を出し　同
踏切は線路工夫の茶も沸かし　同
踏切は糸瓜を植えて蔭にする　同
急行が通つて踏切飯にする　五遊
遮斷機で見ながら乘れぬ急行車　同
踏切りは辨當中途で旗を振り　至藝瑠
踏切の貨物列車のながいこと　同
踏切に自家用一つ混つて居　行三
踏切番春の陽浴びて蓬摘む　同
また火して餅を燒いてる踏切番　同
白旗をヤケに振つてる踏切番　同
踏切で待たされる顏へ雨が落ち　鋭々
踏切番に事故のない月靜か也　同
遮斷機へ自轉車みんな下ろされる　水棹
踏切番小さな畑待つてゐる　同
踏切のない學校へ親心　平三
踏切を怒つて見たが乘遲れ　同
事務員の洋服の膝光つてる　同
子澤山五十過ぎても平事務員　同
專務さん事務員上りが自慢なり　鋭々
事務員の食堂も覗く老社長　同
チヨビ髭の事務員がゐる宴會場　平三
混雜の小言事務員聞き流し　路郎
賣れ口があるまでといふ女事務　同
二日醉ですとも言へず椅子にゐる　同
事務員のパスは立替損になり　同

月ケ瀨上野吟行

火が入りまた盆梅で飲むつもり　鋭々
梅を見に來てまでマッチ買集め　同
苔踏むなと言はれてたれる蓑虫庵　行三
お愛想に上野小唄に手を叩き　同
花よりも團食先きに濟しとき　同
名物の田樂チット食ひ過ぎた　同
蓑虫庵草鞋をとくと一句出來　路郎
落人の如く來て見る月と梅　同
一寸來て月ケ瀨風邪をひくところ　同

尼崎句會（尼崎）

橋本路風報

表札へ名刺のならぶ二階借　一力
應召を階段で受ける二階借　麻夫
あの娘には手眞似で知らす二階借　多茂津
赤ちやんの出來るまではと二階借　加津路
二階借の方が話せる男なり　辛雅
早やう奥さんを貰ひなさいの二階借　宮地
そろ〳〵と子がほしくなる二階借　寄興史
人力車先の車に負けない氣　路花
人力車引く身になれば乘れもせず　山下
大陸の街を偲ばす人力車　浦風
人力車錆落すのもほゝゑまし　麻夫
外人を乘せた人力春日へ來　八櫻
相乘りも西洋人に喜こばれ　正路
世辭ばかり云つて人力走つてる　路風
還都の春に洋車で眠つてる　和一郎
洋車の肩巾廣し新秩序　南濃路
工事場に集まる人の氣の荒さ　加久榮
スパイの眼唯の工事にしておかず　南濃路
工事場に監督腕を組むばかり　路風
地下工事ふつと妻子を思ひ出し　寄興史

後記

▲パリが明日にも陥るやうな噂をききながら、後記のペンを走らしてゐる。▲本號から四ページ増しの二十四ページ建とした。これで壽司詰め編輯に、少しはユトリが出來さうである。

▼高鷲亞鈍氏から「人間性の解放」をいただいた。川柳に對して新らしい見解を持つ同氏の力説である。一讀を煩はしたい。

▼戸田孤篷氏の「川柳二千六百年史」は愈々次號で完結する。完結後、更に新作の句を増補、項目をも増加し皇紀二千六百年奉祝並びに本誌二百號を記念するため單行本として刊行される豫定である。

▼岡田某人氏の「貝釦」は獨自のプリズムを透して、夢幻的に或は皮肉に或は纖細に、稿を續けてます〳〵生彩ある麗筆たるを想はしめられる。

▼大連の高須啞三味氏から、一路集「國境」の選稿が航空便で届く。まさにぎり〳〵に届く。いつに變らぬ友情に感謝する。

▼月評「川柳一ト筋」は奥村丹路氏の支障で一回休會した。その代用品として、路郎、葭乃の「不朽洞雜談」を載せることとした。

▼「ワカナ・一郎とその映畫を語る」座談會は單なる試寫映畫の觀賞でなく、脚本作家、出演者、製作會社側の人々を交じえての座談會であつただけに興味が深かつた。客筋を第一に考慮に入れなければならない此の種演藝物に對する川柳家の批評はいささか酷である場合もあらうが、職業的忠實さに於てよく耳を傾けられた點に敬意を表しておく。

▼「ユーモアを探ぐる」の稿は依頼してあつたX氏Y氏Z氏共に多忙で本稿締切までに間に合はなかつた。次號には必ず掲載したいと思つてゐる。

▲拙稿「川柳解題と例句」の續稿を久しぶりに發表することとした。

▼原稿締切日を斷行することに於て講談社は勇敢である。駈けつけて來る人たちを目前に眺めて發車する汽車にも等しい。職務としては、さもあるべきであらう。折角汗を流して駈けつけたのであるからとて、一々同情してゐては際限がない。本誌も講談社式締切によつて能率をあげることにした。御諒承を乞ふ。

▲不朽洞では今、躑躅やスヰートピーが咲いてゐる。散策のお次でにお立寄りになつては如何。と云ふほど立派でもないが—石榴の赤い芽が蟹の爪のやうに眼を射るのも初夏のうれしい風景である。午前中在洞(路)

募集

第十七卷 第八號課題
六月廿日締切
(十句以内)
課長　大島濤明選
豚　岩崎柳路選

第十七卷 第九號課題
七月廿日締切
(十句以内)
鯛　森東魚選
極樂　須崎豆秋選

第十七卷 第拾號課題
八月廿日締切
(十句以内)
家庭　水谷鮎美選
ポスター　石曾根民郎選

毎號募集 (毎月五日締切)
近作柳樽(廿句)　麻生路郎選
川柳塔　麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇(會報)
文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

價定

一部　金三十錢(税一錢)
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
一箇年前金(特輯號共)三圓六十錢

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます御註文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十五年五月廿五日印刷
昭和十五年六月一日發行
第十七卷　第六號
(毎月一回一日發行)

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地(昭和ビル)
川柳雜誌社
電話土佐堀(八一六四)三三三三番
振替大阪七五〇五〇番

廣告料

本誌への廣告に就いては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

禁無斷轉載

新證誌の刊行は有保法紙に據る

賣捌書店

(大阪)　參文社　三越書籍部　明文堂　朝日ビル書店
其他市内各書店(東京)東京堂　厳松堂　吉岡書店
玉森堂　紀伊國屋　三味堂(神戸)米田寶文館(函館)
石塚(京都)三宅(名古屋)靜觀堂

社關係の人々 (いろは順)

主幹
麻生路郎

賛助員
池澤樂居　長谷川一徹　大島濤明　森東魚

不朽洞會員
橘本緑雨　高橋かほる　福田山雨楼　西田艸樂　永田里十九　村丹路　奥村路　岩崎柳路　寺井鋭々　吉田水車　妹尾八九滿　須崎豆秋　春元紀太　松下小柳子　西いわを　後藤胃兒　小林橙舍　中内翠芳　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾栞　多田一不波　川不葉　櫻田中風　田原銑風　中原銑人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住滿潮　岩本雀踊子　清井水友帆　松田秀雄坊　石野円雄　清水白柳子　水史路　西川愁水　清水春巣　中西筑川　光笑會(大阪)　竹原支部(廣島)　十三支部(大阪)　廣島支部(廣島)　名古屋支部(名古屋)　豊中支部(豊中)　下關支部(下關)　北鮮支部(清津府)　蒙彊支部(張家口)　上海支部(中華)　鐵道病院支部(大阪)　葉櫻支部(大阪)　四ッ橋支部(大阪)　布哇支部(布哇)　堺支部(堺)　道頓堀支部(大阪)　九三會支部(大阪)　函館支部(函館)　梅田支部(大阪)　籔川支部(島根)　鳥取支部(鳥取)　松山支部(松山)　天王寺支部(大阪)　鶴町支部(大阪)　御池橋支部(大阪)　松江支部(松江)　大鐵局支部(大阪)　西條支部(愛媛)　城南支部(大阪)　今治支部(今治)　萬よし　悟郎　晨修　鮎美　緑之助　鐵州　虻之麿　八九滿　双虎　いわを　山川皃　水客　英賀夫　申仙　文庫　里十九　芳郎　人　花麗

支部と幹事

安産のために

妊娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

大阪道修町 和田卯助商店

樹林醫學博士
片瀬醫學博士 推奨 監査

片瀬醫學博士述「安産のために」冊子呈上

SENRYU ZASSHI

Published montly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan,

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十五年五月廿五日印刷納本　昭和十五年六月一日發行

川柳雜誌　No.197

定價金30錢　送料壹錢

りとびきに

美顔水

ニキビ

蚤・蚊・南京虫等の毒虫でカユい時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

▲ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の藥です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！ゼヒお勸めしたい藥です！

▲定價一瓶四十錢・六十錢・一圓廿五錢。全國藥店にあり

ニキビ・吹出物にゼヒ此藥

5—53

美顔水　化粧用

アラ顔のお化粧下に最適！